大乗義章　五

門外不出

三縁山
慧照院
常住物

和書門
類
二五〇九七號
九六函
六架
一〇冊

内閣文庫
和書類
二九〇九七號
一〇冊
二〇二函
八架

内閣文庫
番號 和 25097
冊數 10（5）
函號 202 178

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

康熙草木巻第九目録

木部

朩 一　枝 二　梢 三　条 四　緑 五　生 六
根 七　枯 八　荒 九　樁 十　櫻 十一　柳 十二
桃 十三　梨 十四　李 十五　杏 十六　橘 十七　荒林子 十八
樗 十九　柂 二十　蜒手 廿一　桑 廿二　柞 廿三　櫨 廿四
樫 廿五　桐 廿六　椎 廿七　栗 廿八　梯 廿九　樟 卅
松 卅一　楳 卅二　槙 卅三　楑 卅四　杦 卅五　檜 卅六
柏 三十七　楢 三十八　楓 三十九　楸 四十　樝 四十一　柳 四十二
棠 四十三　櫓 四十四　櫟 四十五　楠 四十六　柴 四十七　梅 四十八

黄楊 四十九　樒 五十　杜 五十一　馬酔木 五十二　合歓木 五十三
栢 五十四　枝保持 五十五　梼 五十六　令法 五十七
津間〻 五十八　胡桃 五十九　猿滑 六十　槐 六十一　櫟 六十二
漆 六十三　穪木 六十四　辛夷木 六十五　黄芩 六十六　狐棧 六十七
椴 六十八　古曽〻 六十九　宇波曽木 七十　椶櫚 七十一
曽津羅 七十二　榎 七十三　棗 七十四　[illegible]木 七十五
佐宮木 七十六　柘 七十七　寄生 七十八　荊棘 七十九
樝 八十　和名[illegible]〻 八十一

藻塩草巻第九

木部

○木 一

ときはの木　木のみどりはみ色されぬ[illegible]さかき木ありといふ 人なし古今にて○あしく山おもしろくまきの中あれ をみわけて思はぬ時のまそうる[illegible]のし字ひとりと 思してはつれなや[illegible]物語よ○名[illegible]なれやしも 故思ひのうちて[illegible]八雲御抄よ括[illegible]まなとふ ときはさのきにみえあるを真木やといふ 我て[illegible]まの木とは年木とそ正 月の初よ吉日をえて[illegible]木をえて常の枝をきりて来に家との[illegible]家 門よ立せかけて[illegible]松山と[illegible]の木く則口傳あり古と三十大 事の

くらみち　木の生ふるしあ[illegible]

さかしき　京の作州時九百七十丈の外 木やなりもあるは山をとく

あのあうくされり[illegible]　木のなくさのりくをりあまし

つくしの[illegible]　つひとあふらう[illegible]

指りひれるとりふ[illegible]や八雲御抄ら

いりく木[illegible]一ー山ー三山

ト野ー う色ー なく色のう色ー 玉札う色ー 室の
うんー さくらー 花のー 白露札 冬とれー 冬ー
去夜秋を みそを とれもー けうー 折ひー みるー くちー う
ゑみー 梅のう気ー なけれー 二と世ありてはあひ ゑそしんとり ろく
のれの幸ー しつきー 埋ー 中むしもむなくもみりみ人たれ ねまもうゆ氣こいり幸まうるを
あくるうまも いうや 見なれー うなれー 生うくかえてうらう 又云そかへるをも云 か一ー
来ーおれー 晩日の山の中しおれー 山札ろく
ちうりこ立 媚詞之 もやのころち う色ミの こちやを 色きの
うけ あそこ ちらく あしけゑ あのくれ 木のしけくて 下くらきや こけめ
木の目やめくミ伊つるを云くこのめ去 みるすくしもりめくむそんそ何と云や あをゑ入ー 梅のる主ー

きれー 枝うれくあとく こよそり 枝なれー ○雅かるそれえこるれ木うそれ そりそり後の世去くぬくのむそ
とーさる主 ○あふうりくしきりーけうすけ木かそこのゝすか らぬ掏うそをくう○伊まくてよすとうし花のさうきー
てよそと世あきり年きりそもう やとりー はやこかやとりうらうとも
とーきりそ世俗うり云るく 云但源氏を作さの紀余を
いくうや なあー よろへさうやうけきこうつむと 人のいそき
とうし あも鞍のつゆりかすせさるく いそしー なとりもそ
へとあり むま綫やりせー ○山ありまるあしうせきのきりうさ もくさー
信のく国よろ札いくかせやと云示か社あうもそりよくそうてこれを篇か よ世よと祝けくうかくそ去うて
巡くるか木の末のあるをさちよりてそれん其木をえくしそかやみある流よそ
社の中よまきく一本ましれうと云く又云篇木のあうゆりまくへそ森いくた
けくて森の中かそくミくしまうやう幸をまてこれいあうやうまそのりの
下かいりてえれへ木のたけつてえくぬや あさーあさのよー 新く朔々
ゆ幸そありとんみくくあむゆていくり
よさ木をとく ゆへうりあさのよこさくこく又云
かの食さうたミくの氣とこくきへ煙とこし たさー けすーしそ
一ちれーさしおーあれー冬すー ミやー 生宮松末 や西狭衣

物語に時わかぬ常木をいへりあまたみえたりこれや　常木引　あさ紀れ
まろ乃庭なる木や宮中をさして謂やとらく　濱
しや一ろ一　此家物　あら一　緑色の皮と　けつてさる木やうらし
ろ一うほ一　ちつ一　ひる一　いつ　あまし　あられ一　いつ　これ
あこ一こけく　大夫のまさつてつされはははつくとて草木此ろく　けさるの流をとなやとえく又は只さのくりをいふ
共えり　ほとし　或説　たつしとひをとほめ　年の始まいてしつるむと云　是不分明あり祝ふ神食薪
當舎だえるもまく法祖楽ろもつくとて庭に薪をつくるそゑうると祝よよ
せさるくりの庭薪ハ左右衛門の衛士り薪とをそさりつむ是を祝よよを
てたのしきをつめよん伊つろすりとらく　ちり一　物かす木ゆする　のつき
まく庭薪とうえく則つくミ木とよむや　之く弁之
草木のり　ねりろ　草木を結ろうの梢の枝や木くみ云称ちて結ふ
ちよ　てろぬく　ゑそえり出ねちて結もみくりつらをとなや乞ま
りふ　えの世俗にも　やさちとの　木名　ゑや　錦一　こまハ陸奥の稲くとる弁
やまうの人の家にちろるなとえりうしる此せ云奥州とひとちれおとこ女をとうよ
りんとそり時に文を飾るなくて一尺りかたる木をまつくりえきて

そふ女の門にちてる夜かりんと思おとこもれの種なく名入れもそく入れら
しめてると云木を立そみてもりきもとしてうち志あひとてえて逢と
えり或又ちつりにすりてもえりれねてうりにひくしぬとえり又ちつり一より
種多もらつかやとらくみ云ゆしき木とんの灰の木や物乃いろにあふ木の其
木と灰にや丈てさせてしや東国の紺布のいろのひうきめそたらもその灰と
さすないやうく其灰の木と錦木と云やうれ木をこうそてされハ一二ヲ本
のちほうよらしや七れくえに合ゆくり祝てて逢えて一ふけさう文を用て
たつりやとらく又或説に云なりの東薪をとりて日毎に一束ツ此女の門によた
つりこまてらく是にて一あり木をとつのくりえんさる伊つくとうさうしれくゆく
よたさてしとらふおるそくまへしたりる一まちかうんせたなとりつうとりえしさうしもん
並に之来朝と云をと一かまうのとまやと云されてあまた結あてせす共千束と
い云へるくえ薪の故りえしれそとらく云若狭云陸奥におとこ女とよりんとち
に時消息をやりて薪とうりて日毎に一束その女のり家の門にたてられを
あしむとえ思男のよつれ木をえん種なくえいれつれハへその人ちハ木をハたて
てひとくにりひよりて志くしくすりぬありしと云男のちち木をそいうか
をとりいれ所して千束をうまりよりして三年ちろやうまよあれとりいれ孫は思
ふしてみえぬ此木をよしえ木と云すえ紅錦のさいの梢によまてろうよ見とう
てたつれもえくとそちりうらとおりしきんハかせと定にさやさうとちぬとう
や錦木と云はつさくいくうやまさ和流ね云はひそハ女くらえぬれもさん
ふこなりしそりりめにさんとのあくりうらものそりりふあうりさんれのと

こゑしきりにむらさきふかしなどやくらくしそこの木をいふはあらしにもいふなり
さる時よりよろしきかよしといふ木ともいふにもありみ五文本にいふとも
江家本ハ
不可用歟

○枝 二

葉茂き日本記よりまとえたり　木の枝葉也枝と伊つり只来之
うし枝　風あしかゝそれ山木のうし枝　りうゐし　拾遺つくしうへ字や　なをしありくなくとそのくえ
なしとありぬうしたしとそりてす
つしとも　下し　又下つ枝共又下つし共之下のまとつ氏字　一し子し
云　とうゆる時ハちりとしむちくとんいそす
又ちらし　又もこし　百し　ともいふや　こし　さし　しし　うえさし　あまハ木　くものなり
とも云
わかし　あまハわかし　せ又いたとも　ぬるし　みつ枝也みしのと　二達も　ある枝く
のこるうれ木　ゑあし　又枝也　えとも　えもし　是ちりも　しと
とよく　たちとも伊つり見也是をひしくや十九とりけるたちして
乃枝と云く只なしむ称之拾又言なしとを大てたちとよする称之と
云し　ふてうれる花　花をしふゆのする　桜や江　梅かも

ちへも共かりつき
のむらもりふへし　しふあのつえをはくしけた木　野よりそろ　枝ある花木と
なり　あられかし　なと木木よりさりき　ゆらさとりくり　これ竜　梅のちろし　はつ　みとりなり
竜　末枝之又云つみ　おは末うこし　枝やと　なと　天枝之と　いそし　とうの
めら枝と云や
なり　松かえし　梅かえし　さえくさ　三枝也　櫻か枝　花は　木よ伊
そし　又ちるさ　枝となしみろつしなれゆし　兄弟をよりふ又只
をき
之兄弟も木　しつえし　又しつ枝共いくりあふよとくもむとえ　只ちよあ
ふしまり之　是源氏は梅のさつしをし　もつてとあり山吹ふと
おもむろ常乃後也水なくて百　木よろものしよりふ
なよありそう梅の花ふあり　まさみるも　木の枝
之源氏

○梢 三

こずゑ　あのすゑ　木のすゑ之梢や　し乃夏　錦を染秋乃し
うれ　末のつけやうまを葉ふとふ　こぬれ　梢之こぬれうれてと　とよ
木の江葉よりなり　よあるも梢信之

さ　とふさも梢や〇とふさらあしらう山にふみきして木にふきらうへつ
あそうふちなれを木にまきらわくつし則梢のるすへ伝あう説にそ木にすり
うけつあくらふふ木をとらり用木と云とて　へちの木にふみ迷うしつとよう
木をと八伊まふてとらもとく是一定や拙人に為しにめしらへよらてどさに
たふ迷つれハとし迷も用木をとらとてハまろひし木を切て後用木をとと
比とそり志うまも木にきりうけてとらあをあそうことくりふむくみと
ふさしとそう惣とうけて捎之とふさころにさこす也をとうと云也く拙に入
てを必木の末をきりてきりさうこさのあとにふれとく折この字ハ統豊の
観音寺岩趣りの字やあしうし山いくあしうし山をきうえくあう説に云
うしをかぶ山うをもつくしよあう所やみ云とふさよるふとたつきたるしと
ひふ山しとうり只梢をきりの説定やとらく又美院に云とよさらし人さ戸
伐りり斧をたしく云説も逐を示不て用とらく又去説云とふさまち原とん袖
木とらふらあとにまそうすしま行くきなしたつう物やささ数米なしまくと
ふやしふさの言ちられるとくふむもこのさしうろきの枝にゆさうちと云や本
字〇ろま山やとふさふちりて明方のし雲も天きう月れりけりなとふや又
云この字とふさふちろとりくるをし梢の名九こまもに有害といへつる九

〇葉　四　葉去之

さの葉 指達　てのーとれそう気を　帝まの後也抜松ならや　ふくひのとれもき

まふや　ー風　木のそちくさ　さ為くれ冬ー　万ね葉ふなく白　冬の也　霜の冬葉つまるか
あとし思へハとし　のたけをん　松乃ー杉乃ー　すゑ乃のとしー　椰ーひ
ろー　なうの　かさく　葉ー　れて字あり　てても　萩のー　萩乃ー　ゆまそー　れて字　きても
うちかー　蓮　あしれー　稲ー　椎のー　竹のー　ゆくー　れく　宇あ
里てまハ　めしより　さ梢りー　一ー　二ー　三ー　四ー　落ー　みされ
ーすうれー　たか迷ー　ちらー　みしー　うれー　とろ
ー本ーのとつー　本也まつみつきさ葉之と飛兼をまり古人をともとふ　りや万ふきりとふ云ハ拙其仮ま神まつ例郊月よ
そうたそをゆへりもとの葉もきしとふやされしさうすろ　あまき　郊月かれハ神山のきうの葉うしをもとう葉もうしと読り　うれー　そ上
葉く　之上　うもしー　ドーしらーしまたー　葉まる　よろー　かうー
落ちうー　落ーをとう気淡めて　木くれあのしろち

浦と海のふかみ　ちりちりのみ字をさらへさらに　くちー　あとー　紅葉ー
ーあし　松のをあしきの　もこしうとより　ーのくれ　おくしれー　ろうく

荻あたり竹なとのそよくやうのくさのはをとゑへしをきのはそよそおとこ
ゑへうしすいこしく葉にようてゑへうかて岸上紅楓葉籟殺といへつろ
まの木にをゑへうか　そよ浦しに　是を荻何ー作の綫也風なとまうく
ろすなれ共て用捨之　てもそくうせのかくをと云をまとさ
かとゑにうへゑ也をこ風といわしすそを
へうか又荻何をかうてとゑへうかれ

○緑　五　此肉葉木にあしく浦つをあり
緑りみとり　わりー　あさー　浅緑之紅緑と云
紀をいへ不用　ーのいろ
しらり　ーの空　をの文や　まつのー　ちとふー　みく字なく　てを　草
まさ水れ　ありー　あとー　えいにうき　ささとより　柳れー

○生　六　葉同之をあるへし

おひさえ　いや　おひ　あひおひ　あきちこの木之又古七比　常にあひれひのやうに　おひあひ　おひい浦く　おひ
あもとあうて相違や　ろうひ
おりやうに平等よと理や
おい浦　まつ　木葉何うと云かにまう　をゑ又生浦あよをとそ
　たのー　あまもと岩に
をまつしま浦

○根　七　草生之
木乃根　あのー　松のー　松乃をとひー　竹のー　すう
のー　ちきことふ　より　あやめれー　のうー　草ー　みく字ありてを　のこより
うやー　みく字ありてもとや又ゆや孫きうなしいへつ又う　やねもきらぬといへつを茅蓮不剪採椽不斷の綫也　柳ー　みく　字ある
ても　あしー　是もみく字ありてをも又　あしねをかすとより　あしのわりー　あし
のかうー　ゆうー　釜弁之　ーあして　抽こしてとち仕紅へけま　ともか帰かしく帰の字とり

たゞ仕み様は草木 ｜倒し くさの孫倒し かくしより出てむの孫倒し
をしらるゝとしるべし ふるきより出たるは只思ひすぐの便也
｜ふる色 花のちるく 三の色辨之

○枯 八 草木之

かれ木｜枯｜葉｜冬｜霜｜雪｜かれ｜
草｜あし｜姥｜人め｜あらふ｜もの 柳の冬 冬の色や ことのもし

○花 九 草木之

初花 只あの花も 秋花｜ 草花や あくめつゝめる
ためらとそり仕梅 うくもちのるほ花むし うくりわとはやさの梅のふ
ふかされへの千 しとしとしや
｜乃花に始る さくくら ｜ちり ｜つえ｜の木｜これ
｜雪 桃之仕あきは 枝く草花るとし｜をとふかとて あとの席や洞らくあく云 よ喩多く只易れとく

新花の｜庭乃｜やとの｜かたし｜子｜｜のうゑ
くのうへかし なかめ｜のうけ ○りさりふそきの山へはましさ
ふひく すんくれふはうけの花れうけり
ちとられぬこともとりうん き花れかけり ゆく花もちくさなりら
数とをふまーつそ様すんとしむく
ま 是古その事やちくさとん只千種や我もふさく花とさくうなとうける
とりくりちくさきんさまくの物とそ常にあとある 梅一をとは是と
ちくさとうとるとて ｜文 めく字なく
仕さくらもふの假不用之 てよ
ふしろく宅の冬とおりうけぬ志つくぬまうとしや 志は｜乃文 古とは 水とも
つむなあしすも志つむき庭へ入りりひより又木
うそれまきせ水ふ入りくきろの下なりとなとうおやう
なれせ別をすてすゝれもりくぬやうなうをひくとろく ｜乃町く
とふ ○山風の秋のうくよみかりと 志あし｜いろ ｜乃香
ふるきの霞そおとしうりうゝ とをの
下乃白｜のすりた｜乃志はく｜乃露｜こうけ
｜みのかけ｜のかあうをと｜あさし｜心ゆふ｜

ー乃夕ちる人ーかめー衣ーの袂ーの袖ーの色を
俤ちりて の俤也 ーのみつうつしみしーに ー笠 ーと ーうごえ
ー川くこ 古こ河之花を苦ハ覧つゝ石つきとりいふて吉野ゆかて子日なと やうよ酌遊よ石とひらひてたうとつへて供養しく無縁の霊を
とふらひさる 箋にや ちるーの雨ゆとふひありつる宮とのあらて 万
ひふきあくーをおしむ ーちらふ 花数く らうるを
ぬるのちりとすりとこく 八雲御説ひとしお給ゆや きゆめろー 俤也 うちるふうつろふ
ちれよるあしをゆうてたる時は うつれー たにより花とよあう又た
うきつてちりぬへきはうるをとらく
うきくの野へれう何花共ありとく秋の野れむくさしていつまて乃花と不限
むのうるなとてもよめれ人同むなるへしうかむうかる定家不弁他もむもる
とたくうつらしき花 ーちる 只むと
きるとしとらし八雲御説 るるとや

〇梅 十 大夫梶花と伊つうハ梅之越花を代むしとらむを皆梅也目よ
の俤や

あの花 梅乃たゆ花 まろ木の梅 冬木乃ー
そく木のー むく ーらそーみ花笠 や雪ー
ちらをみうゆーなといろを 袖よあさいゆふ
といろを 万 宮の冬をうちむてさけ系 万 雨より
雪乃よとよあるを ゆかくしをゆきぬ梢乃ー つかえき
わろそれくー乃ほつて おろつきとうまくそてまえつくとつけ つかみ花
すゑの枝也 他又かつしつかめる枝をそひとらひ説もありとらこ万よ
柳よとかつしと清り乃まも同みく十二月ふよあつ京之とらし
そみ香をとうくそしうえ くうりしき 香を吹りくる藍風 ー乃
ーのそれあきう 白のこ花 やまと乃梅れうち紅乃お
をー枝 万 うれそこふころくさけるそ茶ふの花

うめ是そ梅これ也こそりえのし 初流之 しうしつえ 万○是され いこあれり
くれて鶯の鳴て似あれて梅かしつこにあまりてを寿こしられよめるく○
やかしさくれと浴ましりのむめれをみこしひとへなる文もまつもなし○う
つたへよるなを侯ねと總延てと あそれ けるう雪 指遺けあられそ団
らまくかしらむめれそるうも万 めさる仮也
しれ花雪にるはら氣拍なるまされ 須倍の
冬にあしすり梅れをみ とあり けまは 孫室きへ穴物とらう
これ 拾遺○是為にをたし 柳か梅の色よもをくれぬ
をつねの拍うも梅梅月時れ物之細普通よるおと 和乃こそめ
のしるくめる 含之梅の 未開之 雪落乃葉 是名や二月中旬梅之草木時
節相尚よる順壇定の所製よ
○山さとの初をよさけりうさ乃葉いろ 香さく葉 是を是名や しる山
をも香をも浪見をやさしん題也よる よるを見言あうらし
為中をへらう風志 旬葉 是名之 題也よる 風緒草 日上 初名草 是名
かれうさへ葉おる 之名
むめや小野よる○万代に作るう中よも初 是を是名や○み
名葉是とまさくや花をとうらん題也にまを 作花草 まれくまつけ

葉の花乃いろあらぬこ 緑の花 色梅のをかのるとかうさ物よ取り ○も
すゑまうくろあう雲 ろあしやみとりの花のとりくよ霞和
の油のあう
ゆよ

○櫻 十一

櫻花し 上と同 初し拍そし為し わう木の桜同る也 わう
る也
木乃し みわうて桜とみく 字なくてもより のとあらみしし本 神楽にあり りとのあら きく 婦る
木乃し山し見山しよし雪山そらきのし家し庭
し 庭の桜とみく 字常のよさ 石りとしし一村 わひし紅し為に
婦りくうかれるしそれ いろくにゆかへく
白かしうとし うさらるの唐錦の雲珠にうゆ系ろうり春まそ くうまの山のうとさくうすとより うるそ
花し八重し 是日野よあり 細是日るしても 作えかしりはやし うそ桜より りんを桜

とくくんとてむの字をよとうけ侍 うたゝしいつものきさらぎ
やーとんをしてよとふうたし 櫻しろいのい しれ侍る出
むかしさく花乃うたゝし うつ竹の笛に
よる白ひとつ笛をき 深山也白そいろ まゝあり
くてふかそし花むし 朱櫻とうふさく庭さくらとよめり又もすわう
いろやうまをとひさくらとよめるやとて
尤しうつき さしくらう花之西北みると云正説あまれど只櫻のうある
く説よ付とうく多説只さくらをえあらく注とえり
ー花ぬし鶯きくきをとや 又ゆくらをかへて称を
らとんをぬともえり ー花う
花よさ房とを 愈と云名よめて久うまと呆めふさしされ共たや
くちなと云儀也うめきつかの名なれど亀にうへて
え ききゆうり 一盛や是いとゆうて
や実盛と云説あり 七日をすゞしと
よめて 世俗所説也 ○さくらをまくをうれる年さえをくのむれあうき
亀八をぬゆ抄云此櫻の花のとふやうと花よそしふうーア
のと云日もよ佳して あうまや八をぬといれ延すあうまやをよるとえし伊
えめと云人ありそりむ其よ放浮花るや是て櫻花とよひて其のひさしニ十年
たまをんよあうまよ ー花うつろふんとや 實うたゝま
とをしみうあろや
移うつろふいちがまあーを盛なる时ふうくつきてちらぬへえ文を云く伊
勢つ乃人まふらう給ひめてしんむつるしやうつろふとえんなしえりえれ
此也く ー花ちり乃すゑ ちるのまうひ ちりまふ之花の
とえく ちれまきれなと
云や ちるとりひくをれ是をちりまうひ
れてと云や 山風乃ー吹まれ
風のふきまくり ひむろー 六月ふさく櫻の名之冨士またゆくやみ云
まうえ 六月櫻とも云是をひむろ櫻のなりとえく
吉野草 すべての櫻よあてすの実名之 花より 睡草 うきし草
以下此実名何も花丸よあり
尋つん草 すべての櫻より七日さえよさく之吉野にあり一夜お取云
○為家うしのく山のいろえくさ花こうらんまうる白雲沢
よ雲ぬ櫻人丸櫻を 雲井ー人丸ー この二八 の 莫つん草 ○う
此為兄菜此予抑之 実は名よ之
ほそくさしくふやみつゆめ兄菓何 他名菓 ○あさふ菜いうすくんのうへ へを
すをも志しぬはふのいみちらよ ときそうつうう天世のちれもとく
れらん

○柳 十二 莊子云柳松と故とあり 菖云や

春柳 青やぎ 青柳はしなひとみえて今はり

まとをり色つま 催る樂之 あをやなぎ 万○青やなぎ梅のはなとを をりかざしのみての後ちりなま

ぬとも後しみじのをとし八千代はし河しはふひ

し み源氏に河そひ柳のいれとし かつ門のみいれとし 志てつま まひくとりつ八あり 又柳花

しゆしし つしねのしし 未たに よみ也 霜かれのゑ

はしもれ河しの眉し乃目 し乃いまはし

あをやぎのいと ○青やぎの糸よりかけておりえ たとりつきのやとの鶯うたふ し乃いまし

はし日 冬之 花とちはるあをやぎのいと はつ春

まちの枝之柳 しはしきつつのまそ時わきてまたね 源氏也

漢武帝苑中有人柳一日に二臥三起帝も拝 しなへに悲柳にむかふ人柳とあつく 嬉は〓てそゆとりり色

まじけゆるとをいゑつま 河うひ草 呉君之 甕玉 根水草 上 同

風見草 同上○あつさ弓春の柳は風見草 のとけまきのうちなひくらん 河る草 同お○河は吹 風もよしのの

河る草嵐の河の上にみらん 吉野河春河うりしまとそし 風無草 ○松よのことと八わかの風 ふ草まつ露をまされつ

うも 春霞 ○山々毎の霞まにまにわくま 霞掛に秋の風をみるらん

○桃 十三

桃花 みちとせ乃し みちとせにゆてふし

是乎王母桃之 ○わかやとのけりしの下 まし の下よ月まさし ま月まさしきこあれよ

はすそ むろふ乃けし ○あの河をきこそまめ人日のそ よのむろに乃けりし花はるうも た

てるしの木 万○かの器はよそれもらしの木まう むゐと人そさしや人はむゆへ 紅白ふし ○春の わ紅

きさらぎの花下てる はなあ一 ○人くやとさ宮の跡さの業かき 一れ
みちよりてとらし女方
花まさに梅かそしぬ ○山吹のいろにたちあふ孫とを八重一れ花
ものならぬ梅りそしぬ吉野の玉
一られ 源氏一條大宮まら くらふ山ふ一とよめり 三
西ふれつら
千代草 吴花さ 花酒古草 ○のむひとやちよをとをくらん花酒
花玉 古葉うみ姐然のむすりせ八 三月三日
肉裏にて花盃酒に入ら
ある桃さことさく花玉

○梨 十四
山梨 山一れ花浦一 ありのうし ありふ乃浦ふりて奥
ありとこり
雨一ありひなら一とふふあひて秋をとをまさぬ
夏一うた枝をふるさをふらまさも 流天一 りて 山里 流さ
一とみちうりけるふ流天一の木 万

○李 十五
ききそく一花ゆく そのみの一 ○わうろれふをりくの
ならぬ庭みちはちられの
のまさのころふりも○こをしりての宮しみつまて山うつのうきみのを
りし花されよそり○桃櫻う達をまかく云うさうらのもりくの花と宮うし
いゑん○されをえよすりくの下の道せ
をえうふつまうさぬけみやそかまさる

○杏 十六
○ゆふふして白ひろめきんひのりとろわう国なれうろりくの花○りろ
あしのうしのく山まされをせくをのうみ云くぬうりりの花○しくをよ
もきくたてしくやうりをく
の梅をくりて花まのをさく されたなうくてのしをくの
やまとなをあしぬ花 見とやをりうをくれ花
うつをくの梅をきいなん 桃李不言
とふゆく
○楊 十七 此内山ふうをふあり花の梅まをあしされさくちち花と
ふよつまくあしうり作

○わきもこにあひてひさしく天下れあへきらちるのこけれあうきを孔昭云あへ さらちるにとへ伊倍橘とうけつき七寺令张云橙扣名安弥太知後宗的柚而小志く柚を似橙而酢お江南より奈我醫师の中侍しし八橙を兎耕及なりとらむ訓八あまたちをるく橘皮にて不用く然八橘とよんこそ橙を多とシるとうらうなりうるやあへ しあさと誂れとらく

たれ橘あやしき色なしあへし

とこよもの

とこよの国よりもそまうれへ橘をとくとも○とこよ物この橘のいやてるふわの大君八そをもみるこし伊やてれと派照らうしとなせく大君八大皇とりけるこ としへいよしくとらせく又云いゑてうとわの大君なりしそ祝言くとらし又清足王皇幸弥後宮干时上皇燕艶やほ宍八左大臣橘诸兄家や江上所舡遊宴时人く気らあり所艶よるを○橘の十れ橘やけらりりしあり是八後なりすや仙を时さしうの橘をきさりくをよちとくしあり とらと

風よちるたれしと袖よらうけて 万

とけうくとい色なし をとく色さし ちよし れ林

をうなんとき 花时るのためく橘八时るのやとしや し札白為る香 万

ちとり牙れし しもきなへ花なへられ氣佀色と

黄之札物とい色なし 天平八年左大弁葛城王従橘姓之时所艶やとらと 花咲なんなりし花より花の枝あるを小 うつろ物 日本記 人乃嬉しお為とや りろゆへみむりしのへのとよあらりとや伊勢物語よるるめの家よて橘をりくきうよめらとや 宇佐时むかしあひしれうめの家よて橘を見桃木石のつるすとま生所茉の橘子とさら 山し 此物やさしことの橘よあしそうとらし 山しのいそしくれ見ん乃なる

葛菜 ○代とくとゐそやらへあれ乃むかし香とるうしこ油まうつてもら花玉 茉 遊女草

○らへとらへし此八むかしの遊女茉さけう花のくそのおりひお花玉 葛れ人札袖乃香 是加帝王系図云鳥仁王皇十九年辛酉遣仙るも到旅岑世国求非时香菓今橘是也名守り袖よつてみくをてあらしうそ葛れへの袖のうえし云名又天皇依所脳めつらしき菓子求て向ちと老く小の国よりも帰て帰り三年をつらとらし呂宇佐使のあさりし花うと六成折りしより 山しのなよい

てめくし 山よら花孔よそしうつくし気更なれをらり又云 牡丹之石上ゑしよあり物よるあうそとももらり 贊し 是抑花き

抱小乃りたしを遥遥院へをゐや家小無ふ御世ら作くりしあへ よら花のす花とらく所とせうふなうるを見をつしてきされつ気花なれせをてくのまなかう

なり霜也

○荒撫子 十八

○此なてしこをりせはあらき人をとられてたより見あらきをかうしうな

○摶 十九

あふちさく　むめくし　されぬくし　又あふちさく　こさ乃とも

をちふ　あふち木乃し　○みちのくのうものうくのかしと　うえあふちさのあふちうけをなれきさ　時る

しの枝は　あつくぬる　しそり　のつふしれをれゆく

あさまのをりとしのと　玄冬茶　○山とぬく彩りおのうう　玄冬芽霜とんなうてと

くれくれ　みうゑをりとの色はまさそしうけ　五月

ぬ　乃玉はぬゑとあくおきふしれきれ

○梔 廿

くちなしにそれ　いはぬ文　みくにや　くちなしとよむ也　不言色とよめり

志山のくちなはし　耳無山　紫也　いはそてれ　四　同さくまもとめ草　日のあたて山まも

こゝろ山はをよみあつまさ山吹乃浅黄を　くち

なし乃一しほ染乃うすむらさき

○蜷手 廿一

りこはるの色にて　ちるとみえてしつぶ　ちるきえうへて

わうし　義浅黄　いろはくわうし　淡あふく櫻

ふさせてら色をとうしわうし

○紫茶 廿二

紫茶詠あうすうるてかうみうりさうつさてく

え是木のう進をお紫あう末之摘ともりみちとよあ

俳諧又うつしの木を紅葉する木や又梅ともみぢを
是とりてうたえ

廿二

初紅葉　下　うすき　一乃錦　ちる　一ちる　一葉
一れ　照　照りみぢのちらし　松を下　一　あらしに拙て又ハ伊せぬ也　霜かれ
て落れぬ葉よりえのりし　岩の手入一　石とつもりてきえさる内よ
あら紅葉や我岩　二葉の一　去や但是ハいりくとより　句ふとも読り
うけもみぢとも　とふ草とも云
○もみぢ葉れ句ひそえけりてよりまぜつかしの木とたをつきうさしん
○たてもなくぬきもさためぬ山姫子うちもえてうお錦をかけし
又えん草　○秋もうや何ぬれ比のいろ〻草ちる　○とくう山
そなく鹿の妻こひ草の　まく私し又山風そ吹順徳院御製　妻戀草　ちくあかし比
いろものこらず同御製　錦草　○立田山松をとえてたつ錦草しく　れくましれ草のよこころ同御製　龍田
草　御製　又とは木と一をとめ　右その狗や今の　不可詠とらし　恋の一
○一こ山りく霞のゆふけとも恋のもと　一すめ事ん　ともる
ちるそくうちうりくり是をまくらをなくへし

行くもえつる　又君云　おいけるに一比数　一世させする　後撰　たつ後
の山とともみてきて　後撰是本　不可詠也　一は行く　新六

○旅　廿三

ちくうれ紅葉一ちる　又ちくろれ宗と　のし字ありとも　いとのし一一れ
さそれ一の　そり　うつして乃下　しらをさとよ
めり一比　一葉ちりそめて　のこれ一　游行河乃
けれ一　さふ山うも　一らめり　一ちる　こなし柏　是旅や　一文行く
そうしてのくろれもえちハうそきすまのひろすをきう

○檀　廿四

もし紅葉　しく野又もまのかう　秋ともらめり　一比一枝　りくえ　のりし　八田野に

一比たち更 一の浦つ更

○檉 廿五

戸檉との紅葉 立砂にしめつて うつひとし 一 ひくみく 一 浦

そ河一 いそうて一 あけさみく戸ゆくとも とそ

多こりて

○桐 廿六 一葉落一天下秋しるり 秋桂より一葉れちるむろく又 鳳凰桐にすむといへり

桐の一の落葉 一比一葉 一のりろし 一のたも

みちかろきなく誘り 一の花 一葉草 美名や菟玉

○椎 廿七

椎をく 岸の一し 一のさきた 一の下たそ

一のことを 一のめし 栃ち一 一むろふ 一比と

やて ○ともやもるとしそ まとめむろのとの しぬのこやての あひは たの一し山とそも 一八もくしともるう又むろを とへむうひ のととも花ひへやとめ紐や しぬのこや てとハ椎のちにされ枝とらやともく 一を落葉せてそとの色

里 戸しふりみちぬ物や りみちをぬ山よらや狭衣ふもせめても尺 ちきぬ空をり是いろまゆめりしとみち男と入ても世の子ゝ落花 一

の後紫 一れの葉 しつ比松さく一紫 一まく

うことも後世山 一と誘り うき?りのむろひの

きり

岸に椎まりても万 一紫のちろん 一比葉のき 一の

葉世の花 ○杖風に松その志ぬのれちつれを遊よくろ石よくりまそ みる

○栗 廿八

小くしく栗さしまそるてた みなし一 きた一 わか一 そへらよたろとそり

松ら一 一志そし 伊の一 一さその雨く一 ちそらく
と逢くり落しく
○楞 廿九
山の名 一れ案 一れ名案 一乃まて られ 名の一
○撲 三十
まりり思ぬ名 さがの河名一はよめり 文渡舎河をもよめり 一けり さがのかくり のくぬさりり おー
一渡舎河ふ わりくぬ名とらあらまて 松名津
濱大河淀くりもくぬおくとりあ里 わり一名をと
しはれとやうてもやを
○松 廿一 十八公栄お後あ一千年名宮中源とより文蔵を知松指 せより

ちさやふる松 只ひきしや 名ら一しや あひあひの一 松ひあひれ
一 其時生あ 小や たし一あまさて忠りする 一をまー生 一乃木 指をも
浜ち一れ木 あさまら一 子指とよ 依と うたれ一 生りくふ名 さらや又ひ
孫とら松と云 婚一て一 婚の一 子日のとし 文この字なく
せより
まつせより文名りさあこらふの子日してせ又さし子日してたとこもより又 て只子の日の
ひくたらや雅へあこまつとひくなとくひとも子の日のるやみ○わさこうわまき
子乃日のまつふなりまし名 あぶらり山し人りひのくく文子日のみ也
夫すと吉伊つりて文子日て正月のうや文子の日まろともより
わり一 む一一 ひと一一 ふ来まて 二案の一 いは一を
乃一 百舌の一 神 門一 正月之志行り 門まつせより 山一 石根一 一の
孫一のそひ子 石室ふおそ落一れ木 万 忠むられ
うひれわり一 万 海一 浪 波一 加茂よ伊へろと 其只云つ名之 浦一 濱一

あり儀し　まさの入江ふりわたとて　もいろくまるもふし　波うつ気しカし
松のあらしにたく　うるなり　しれ枝の海るおちさる　ひとり　さらや　気すく
あふ吹りうさおく浦しし比下気　源氏下気し廻る　流江下気と用や　し
れ杉ひすゐ　源氏　十ッ人つまり花　松花十年ゐ一　慶滞くとあり　り気ち
つまうせぬ　はぬふをみちねし　りみちをあく山　伯夢詠とそし　しの見
ゆる　不変の斧やいりもそれ　ゆくの斧や採と書　しそ古今の父なしとり色つま
松並古今行ゐ上　下弟といへり　し柏の浜うゐとり色里　万　ゐれし　之　そとく
ひとし　ゐ原王余流道　罢詠之とあり　神のし　上宋位吉流　伊勢大輔あ　うあ井し　源氏流くゐ　といへ共只
墓の上ふうゐふう松や五粒　滝し　又うしのふいゐりて　玉松りしとたあり　ひとりし
松とそ五本うゆうとあり
そのくを出まるうりう　[illegible]　ゆくや比松のいしま三
き流又ありゐとまあり　やときのし　古里きみ縁ふ待るる及ま流いそ

しろのし　むそひし　岩代の松風うぬいりし流の野中まよそ入れむ　すひ松とつありいそ代とよへ紀州ふまふ之
むをひ松とよひて孝徳天皇の皇子とゐ三二ゐ罪ふ依字天皇代母明天皇うの
縁まれりして自傷結松枝ゐ◯いそろの濱松りしとひ流むをひ文幸ある
そ又りんへま尺りんせゐよりし　とこうていそうろのむをひ松とむゐもよ
尺そりしめさうとみゐ結ひ松の山そたむきとゐ押てしるや松の条と結て是
のとけ流らんきれまめんへてここんとちりひて結ふやまてまふしくあり八
とんよむそ◯白波の濱まつりとのたむけまりしく代まそりり年のるぬらん
まうそむをひ又時ふをさくりひて岩をもあまとも伊のりてたむくうやたむ
け草とん是をゐそ又このいそあろのはすひまうてりとあくるせや八雲の流
流つも北るとそし又ゐ石代のきつそ伊みあくるせや今の墓つわたいさうさつ
とゐとやされとあゐの松りりあうをゐ君皇子の位まり気結ふへりうさ
もなくてようりぬ事まてまとゐありゐたきのうしし　のをころを思へてよ
くもるれあるゐりとそし侭山むすひ松をへむもとけぬたしとこまあり又石代の
松あしそもむをふとこあり家指り方◯やりくさ比夭とうろろふと紀へか
る松比流枝をわき達へむすりんを丁婦とそし松日山家指方も石代松よあされ
こりさうり　あ孫きのし　奥州ゐ　あり　あ遠をえし　奥州之只これにとあ　孫まの松関する元
あこやのし　おね子あり　月を讃ま　流浪し　指州　わくれのきし　同菩を　よめる

なかおの一 日 なかれ一 かうと字あり よさの海の花かけし 丹後

一ーくろ きれ むしあをの一 北州 すみよしの岸の姫

一孫をむかひ 影清れ一 つくし きろし ○なつ松のこゑ 尚さへに見立て 旧

みち行りつまなける秋の香のなさ万やたる松を むかひ一 小松 一夜一 上

ゐ示元祖ある説にはやちまをとのことくろく

翁草 異名や発句にあり基俊哥○住よしや庭のあさつゆのおきゐかくさ長井

のそてみかく人をれこらて住吉の走内より五ゐの戸つとふ松ありかの

まつ年ふりて翁となりんしてすゑをかりつ孫にむひをときし琴とたうへそかり松

に菊をあひし旅ゆく人かりの枝入なる哥○拾庭に示し一の戸つかけ

しのそすむ翁かくさの花もさかりなん是にまりてきくとを翁草とやや後

翁と祝しする五月や然ふより発句にも衣部に入りみ後拾哥に衣松と○

すゑかしにありとりふたかの翁 手向草 是も発玉にあり○山さとのゐられ

草きをゆく林の風ゐ行らん 是もの手向草宮をふそたなりゑこ

又こそみかる是もすゑうしにゐ神やう 初代草 ○大内ゐかりてしき山の初

へたんと詠まりさへつをあまたとく 代草りくと古人になれて

よろらん正月二日大内に住 文魚草 ○とく家をとこんの名衆ゑふ

松やへ松やあまたも発句にゐ まりりろあれ海を法をまいけ

又是も異名や発句 秋部に入し秋松に 延喜草 是も異名や発玉主部に ○たの野や宮忠のゝこ

そのひきな草をにさきれ玉かり岩ふれうれて

豊花草 ○河をかりそてつるやとのときしき風も変るに 是出草 発句にあり異

時にようあへあまたと発句にあり雑部入りや

名に 百草 みちき拾におり 千枝草 同上 弥草 同上

○様 廿二

たとこ とみれの花 大ともの守や○山のみ岩ふしくちしくゑた

めんらうくれつるよらひろゑ拾

○槙 廿三

槙の山 さくまれさうせ ゐ山とるけまをせ 一河の底 一の霧 一の下

露 一さそれ 一れる木 一山 河をたまれ

と読り 一のよけ山 一れたちのれ

○様 廿四

玉掛たゝる玉ー たゝむつくきやら よるてとふあり たゝ海ー 北は掛立 濱風や やけと
のー 山のや又これ 天山なり たゝ山ー やちゝをー 喜ー うら山
ーあくと有多つ年とり色つま 長安壹謝う子 つなれ何や つゝくー
○うハうこのつらく掛つらくなこれともあるぬとせのて帰の八つら
く掛ハおとりけてつらあれうつてきと云先又安貞とりきくよら末と
よこみ云つらつくさくふあり色とれーめくしてご風くつてきとよあ
れ先と袖中説や不也れ又とせと云説ありこせきふあや大和又としのりく
年のてしめ こせ山のつゝくー八重乃ー法ゝく
やとシり

○扨 廿五

みつの神杉あやーうし 井のこや又云廿杉 業又不紋あるとそし 神ー 三輪の神榀 共云
むらーーむつ二とやのー たつ勢 と海ー うこ山 ーた
てる門 三輪 志るしー 同様又三乃 神れ西よ色 又むつー又ぬさと

里三わのちふ里うい ちふ 万 ーしるくれ恋 ーの杂
うきむー 餅是とむと読りわつ木のま又こ人のあさる紀子とむす こむすめとよひうこしと云く又をこのすゝこ 餅のされ
のこくまあかうくあらとたれハふや又餅榀とハ 杖とりつく化さら餅と条れの欠不用之とこし ーみのきあと
よあ里ーうしとをよあつま ことわの山ーとを法
法由た里 りきつのーすらふとうれさら杖を
あらし 拾遺 ー木のりとつ系 あひおひの二を
とのー ーの一本 世多のー系 あふ杖

○檜 廿六

さひ さひのくさ ひと云ー説や 檜系 先孫なと よあり をいそ孫のー原ー系こ
為まれりくのーたち 山田れりろれー原 三

是拵のすやみつれ
わのゝ原のあつくとなりもといろつて
拘ふあり霊さしも草一説拵とあり三間草○大内やみをむつりきさ三
みしん篤き家兆もろりけそさひし
き荒玉云の部よみや何云部ふ八ゆく四間草○山時は四方を八角をと
も元日拵第とさきみく水被へとえしさまりて四る菓まりをむそ
さしけ蓬莱荒むて従猶ともさ荒むふやうく菖蒲とうけてされ幸草荒む
き荒むくもりてとくさしみを元そとつ菓とあり
○柏　三十七
なりのそなりの葉うしもあらのひろそあ
さうしそぬ乞や河まふあり玉柏加右めとしなりめしあゆり
しあらしひろしあみしましー本やとし
あらしあらのとしやひしてしもとり代神柏よあり
なりしーとれてしーやりそきたよ河いそとしいそは生うる拵えうしとくとえれかきたうねといそふうそくあい

まめり元とえしく又云石をへりしりて伊へゝ子を小元とえし
是りくとや八雲河説よそ帆ふ石之元うしれよありとえく　このてし
なうし山ふあり打かとらとやまとの国よそこのてうしもとと云之いうく云
りふそたれ人葉のちことものみよ似たれへうく云とや又云このてうし
もとめ芦むせいひあかとちせ云貝りぞあかとちにをとうへしよ似て其の
しる気や万にそとことをうの荒と云もおかとちのすや又柏れ葉れりしい
りう時を見のよのしく又ろいくと致れあうときくされそ○なう山の
このてうしりの本されのてとまもうくうまわちまんうふ許らけ人とい
うりうすうすくのむのうしたりて代きろうり倭人のすや又○むさし
めてましえうあのたそ居うおこのて柏の其のうえ頭其ておふ節其元
あし　万りそ日本記すを河緑柏とうけて国史すそ三角とうけてえ延喜式よ
をを三綴とうけるを独云うけおとうの貝り元左とのとは五きやとえし　ふけ
三角し　是ふ河きこよを撰あまうさあり加三つめく柏叙元つの柏とえり
是も伊勢の元もとそ河の岸よせう柏之其とうりて神代ともそ
あくみれ台ともうさ又云みつの系ししいしとへ三葉系しましえし又まホ
おふこのみつのうしいりうすうすよそ拵款に集よそ元をすそほれ家
よ生れとよあり与うなとられりくうおきうとてうつめれとひうしやあり
ろん今の代するしあくみのうらふとくれたき戸と云示ありホれうへおうつ
られやうりおそしたひさうとのかみてきりた海を時ひらふかして落ちうとそ
とうをたてき海よたちうらをりりとくうそ落拵よそとよするのきとうやい

ひつきさへつゝうり是ハ神宮四度の次第のとき必入物也次前の次あらひそてゝ
四代次内のわきふとくゝのしと云とおなじとさうくやし次のつゝさ
この足つれうしもとおのく一条をちてよれいそのうへよこのことをを
ろうくしとさうあまとあしまさしそしいつろこなりうしいとも云也廉行流
師云○おもふすとくれみし海のたり柏かゝくそたのむひろきあくこと
うやうよ気けとりまさこともありたをハここも廿日あらんのりとこうりをくわり
うしこの招とてひろ気二四寸かうこ三尺いうり戸とくし書の
本業の条こそ似まと云と又右のゝすをりし右の下ふあり　みるのる
とみくめとし　冬野よそたつく本条業文色のこらぬみふうしりて うまてくろ条れ枝よつえるく甚まそとたちぬ柏なれそ ひとりもその山とわきれぬ柏とよあり古と○いそのゝ 足あらうとおく川と柏りとの山を生すま也たくよ　条ひろし
ろうこえ招わありうしそ条ひろしとしとそをうけ
うすくなれ　このそしの名

○楢　廿八

なりの条しの条そうきしのうれ条しちそしゝう

志るしのひつたち　しの条うしそ　しのう　納涼れ 条抱之
志るたまきもくれりつもとり色まと　しの着も
しのもり志るそ条とそ　しのもしそ

○櫟　廿九

櫟れそう夢いそひし　うつの祓又色八 伊まそひしくわり　しの木もめちく
れ枝と伊色まと色しまそ　もうせたありわり 又呉をあう色 せう入をわりの字
ふきうてふしの木と讀てしれうくこした　○乃みこと述 もうさうや
とよかうなくりうえしとよくのつ茂れるころさ

○椎　四十

椎れふ條とみくあさうち　武色そこ 山せ　しれのう気すまれ

りりう こしのしも海し 又み百れあし河気しし まのも海松て
のすゑ ○うらうひきもさ紀としし山そえ 明りきうくりまと
よ松の末のさえゆくえれハ
よあ里 黄葉か ○ひさかたのつきのかつらもあきはなほもみちすれはやてりまさるらん たへぬ林の色うさ新六

○桂 四十一

ひさかたの桂月のし うち丹れむと月の光乙又月のうつらそされらあと
てされ(?)方ふ月れうつらのこやハなりうえとむとち
らもた
よあり雨ふあるてふしも岩わとししと折河 きうたいの
後也漢の心
ちゑく
せいし しの花のころもと ゆつし あありうえ
この前桂也 湯津桂木
とうけ里 め心ふ見えて手ふをとらまぬ月の中
のし ○あまひうなけうあきは神山のりともろのうつらそくれうも
なし

○榊 四十二

玉榊天照大神天の石戸とちろ給し時諸くの神ならとこやこたまといて
いうくさんと方舞さ海く々のて給し時まさのきされらこつ枝をそた
さそとうけ中つ枝ハまうく鏡をうけ下つ枝よを幣とうけもたし仍あり
のうく山ふは海さうくきこあり品を神のあこ里申そ下緑とうし
うの木 榊之 しとれ し葉しけりを間 ○古と思へいくやしとあ
いとまし抄と孔昭ゐ伊勢秋宮ふをいまうされたしこをあとんみもさのきさまを
おりよもをとれくとうんやされてあふるとくやしうもとゐ乱なれをたと
こせさらましうそ作うきささをおりよハとり
まし抄とく延しめるむし 是も後執方之 海くしの葉 榊也又
受ふ賢木と串よ作をるりのあれをゐくしとゐひそ ゐ太神
ふそあまるろくく榊と玉くしとわりんすいとこそこ いもとの
山のし

○栗(?) 四十三

そみし栗原 ことし わひのふぬしまゆ 山のつ
のうのふのししこ 桑子之いとまうやい世也後述ふ見ゆ方すや
くそくうそとやろを閏すやくとしと月五巻

ーの枝 よむともはなしーのいくよと ー
あさられて ーれもひら 矢さすもひらふあらそうにことゝうよもらえたとをあらていれる物也 又
玉只ちひら はくもも山よふねーまをと讀て ふるき
とをよあり
たれーのうら葉のあらたまて 〇うのたりてはらひつきふうらもふめくてむとと
はきしとりのいくよと

〇槽 四十四

ちらのーうくーーれ葉ーけり 切たともゑれ
りと山のーの木 ちらーの枝をと絵ともふ雪の
うさーの花 万〇りはくふの八十のいもらうくを まるふるねの上のうさうーのを
と雪れ あゆうて 〇小車のりうてふうくれさくーのりうまをちらつらえん むうふ

〇櫟 四十五

〇大ぬ河ちく秋のいちねたな山や嵐の色とうきらん

〇楠 四十六

ーれたのとりの子をもくさの木といゑて

〇紫 四十七

ちる紫 ち井の海ーねまーはうろのーなられ
海ーいりーあれいちー 大原 いろー原 〇みちのくの五紫ちうのいろを
くひろのゆうさむことをしまさん五紫原とうけて道れゑとつきの紫也又
大原のこの市紫のいりーりとよあいつーーいわちーえ見るす地伊ち
ちりくいちーー
まとふうさえ下ーうゑーふーーなーーさー えー
くりー をひー こー 名ー とりーハとえよますとしりと よむさみうてなとの時意の名

と付れたりとのにあり　春し　ミみの下し　しのさ枝

○椿　四十八

うちの葉　紅葉をそて　のちの七葉　なつとんいて　をのこもとや

○黄楊　四十九　閏月より一すつつめりとなり

なかれ枕　しのそとくし　りつけのをくしやとうさすらん　○志つのめかうしら露をとらぬあさゆか

○接　五十

志きミは　なかむ　又志きミつむ赤の色やとよめり又○志きミつむ山ちの露にぬれて夕り暁をおくのすミぞめの袖　みみ

の志きミの葉をと志け見　しれ花　志きミりなせ　花なかむ　あ

り水にしの志葉をうけてなとよめりし　りの茶

名所○世をいとふ人すミぞめりとみ石　侘り子志き見なりあく山河の名

佛のさめとさみやまれ

さしん　○志きミとくありのれしきにふちなく八河にあつきの玉　たぐらまし

○杠　五十一

ゆふにゆつりは　あらく咲山のし　しのミ

ね　名所や○あま逆そこの玄をとむかふ河志るしとてゆつりはそのうさし神の山人○としあにあつと八寸逆とゆつりはそのひとそるけ逆むの志やミえ○ゆつりへはあめつ香うもゆつり　○としとらりけころをとつそのえねのうちよるもなくかわらりゆやかららん

親子草　河親子草人よあさし夫人

春ことらり冬をとりつつぬし

幾む

○馬酔木　五十二　馬食此葉則死故云馬酔木とい

あせミ花咲く　○とりつなけ玉田よこのくさ海ちこ海つくしし

いこ海山りをよめ　しをよあせミ咲さく此葉を馬酔のむ元

又山色すも○たそろしやあせミの枝　とわたミそあよむうひ伊のれゆのをと

よしみく河の瀧のう色にしの花し花　をわく字なくて　を新六○三海

くさえむしてり道玄野なりしけ　あしひの花○いけのみふかけさるえ
えのあ努え枝まし是らん　ふあしひ
のむもと袖ふこ見へる　あしひあせ見れすし　万

○合歓木　五十三

わかやうのこするわか衣こかくらんの
ねふり木　かうり花れゆえてけむらん見ゆる
らぬかと　歓ふのちれ○ひろきさえよかあひぬる歓ふれ花

木花訓かうりの木歓ゆりの木ねふの花とかくとふしと志の道なと花とよ
むへしとふし○山ゆりさりつよと歓ふとゑとうへてかうりの木すそ人ア
とふらん○たく山のかうりの花をあそれ　まさもむをりぬ男のさめし
とそ○世またへぬ大内山のうさなりふゆらえかうりの指をそみる

○指　五十四

見むろの山れかくしの木　はさかりくもやれく山

はなしのかさ　道ゆくのーのかさ　たちむろふら
む　もり色ぬ文　しのと　○まさけと人をもさめぬかえの木の
いそうかふのさ男よ吹よそり○はう
まさんと契れりものしうさ○らひ
のう人にねとうしてのたひんまそりとの契てのくちやなそすん此言え六
志みきこきむをつかふかえふふて
百歳の言や判ふ左こけむすつかよ指ふかりてとりへて何るすり待らんり是
ハ史記とや文ふ晋文ふう狄の妻ふわりれとそ我をとまさんす廿五年まて
ゆへらきん其時嫁せよとやけれハ妻咲て廿五年の比をいすや我つうのう
へよ指れひすんとりひ入るるとしそ待しりもしてれるをれもつるよ
やとらく○志ぬの富むうされのなかうられをりそうへまるうううとき
りうくり

○枝保梢　五十五

○ちさのう人へよなりそうくれしよつのとの下きりをゆりま志ふちすり
けま

○梢　五十六

みとり　ゆしらをふくれむろの木　志ふの三川

うつ千年ふるしの木 なり色あしいちゐの一木
むかしの跡はもあらはを
としのうつりをしめり
なるまでそふたてる一木 うられ

一の木 孫なふ一の木 わかなる山の一しれ木

○令法 五十七

○しらまぬ ふりさかる山のなつなりなつなりつゝそうかし ○そ
よきも木のめもまのりさつなり時をふけつゝ人や見む○えたつなりつゝを
とし宮をさしぬれそしつりをさひまわりかつむらん ○さと人をわか家
つむらんもさかりとは山を今さえ家めきふけりし○孫やりうぬと山のえ家
のえさかりり家ふのと出く人ふ志らして

○津間ゝ 五十八

○神さふるいその つましれねやとりくしふくやひと夜下よしれりん
○秋とくをよるとのゆふしうりけつらめ神さひわかの伊ろれつかくそり
○としを見る磯のつまのしのひ孫もあらりれぬらん波のゆきくわり
○ゆろれうをふむしてゆあまささら孫なふ津島てよ給そつさつく

○胡桃 五十九

○友山のすそれよしけえくろとりとくろ見ゆとふ家ゆてうつらん ○河あ
まもわれぬくろとのかいうもてとのうむとかすくろむらむ ○友山ふ志け
とりくれのひめくる見りけてとまくのりと見あひうか

○猪滑 六十

○足引の山のかけちれさかかめりえへらりまでをよとまとうしや

○搪 六十一

○と山田のかりしろくとの生色てわか身の生よいてよわりうか

○櫟 六十二

○りさきえ志けられひとるとうの木のとうくしさとたてく色さむ

○涤 六十三

○くれなゐのそのこにふぬやうなしの木かうとしくれふ帰うな からん
荒うなし

○りうぬの木　六十四

○春りをむやとの梅その○ちぬの木りをうぬ冬をとれをうきかりふ

○辛夷木　六十五　武木筆芸書

○うちさしてみをよそりうつこゆしの木ひせえさとうりくはりか

○黄芩　六十六

○よの中ハうをなしすともひをしゝ木の冬ふ出くを伊りしとそおりふ

○猢猻　六十七

○おりとそもすさめぬ　そなの木のそしうとりしよすこをへなかうゐ

○梗　六十八

○うき山の花と移りよましるねをそちのひくんありとれへなよう

○あめく　六十九

○秋ふりき山の夕霧ゑあくふとのきをりろやまらく涛らん

○うそしめれ木　七十

○冬くれを霜といふしくうそめの木れいのすりたやいとくみ白らん

○椶櫚　七十一

○あさまくき梢りりなをとたてくを移の木色涛むしもくまりふ

○めつう　七十二

○貌窓のりうや戸のけれ志ためつらめつくしけなくぬおく猫うれ

○椋 七十三

○おりくのき — の名の木の家を
たけ足道行人の笠とりぬ八たり

わりやどりの名のみをとりきむ百子
名のみをとも鴬やうくや

○棗 七十四

○むりしきりをこりからつむろの木とおつあり色とくのきをとりんすめ

○梅木 七十五

まくすめく浦クりよめ里

○さくら木の花 七十六

○うた保山代さ松きの花をよみをりも
ちりさかふらんみくくをりは万

山乃ほ松きのほ松し

よ家く谷みの気山代さ加紀 さねかさたれ 同まと 吉山

とおはようなて里とのつりう嵐代さ家きの
いさ松をみてわま見もやさむ ひうけ乃さた紀

○柘 七十七 柘又似棗之刺木なとをし伯のに葉柘と飽ろ棗之類也
大なあつ木とをし

此篇ニ柘之左枝乃派来者渠者不折而不取為
時也

○寄生 七十八

やどりの陰や

○荊棘 七十九

むもうの花のれを川原のやのうけう

○棘 八十 棗木同之

うゑ木 但あさ夕掛や ーさくーてみるーーしうゑそし 室ぬや うゑ戸
志ころとひにあらず 庭よーまれ 引ーばうつしーまれ 神そーー
けるは住吉の松 神代よーー志そこされ乃松 たる
とーをくねあーてーー志 根をふうかるとや 但孫乃のむき てをたゆ
くー志花ーて 花の木を今をはりー志 て川
めるーー志おの梅 ーたそく志あめ中よ花 あふち
と家よー年こゑをせるを中よ種 孫あーはく
櫻はませてーをきハしわり木れりえて 八子
種よ菜木とーてーれはあゑ ー志田 ー志秋萩
ー志时待ちを秋あるまし 草さ ーているし 秋田や 一色

とのあてーこーて 子尋れりけをとー行や 半色
古庵はーーし萩 子色やをとゑうんしーや

○和名めく 八十一

辛夷 也万阿良ゝ木　菝葜 宇久ひ須の佐留　藜蘆 也万宇波羅
石南草 左閑良の　猪苓 加志波くぬ木　秦皮 度祢利古の木
黄芩 ひゝら木　茱萸 ひえ佐く良　巻柏 伊波く慕
蜀漆 也万う津木　蕘花 さく礼ゑ志　巴戟天 や万ひし良木
伏苓 万非保　女貞 多つの木　枳実 可ら多知
釣樟根 素菽くぬ木　龍眼 さるの木の実　楓香 かつらの方市
黄蘗 支ハ多　食茱萸 おかた羅　白楊樹 つき夜名木

椑白皮 あつさの木　黄環 ぬゑのつら　接骨木 つゑまつさ木
賣子木 うそちをの木　揉実 つるそえ　五倍子 みしゆ
恒山 くさき

藻塩草一巻第九終

藻塩草一巻第十目録

鳥類

鳥一　鶯二　燕三　喚子鳥四　雲雀五
雉六　山雉七　鷺八　鵜九　時鳥十　水雞十一
鴈十二　鶺鴒十三　鶴十四　鳩十五　鷹十六　鷖十七
千鳥十八　鷲十九　鴛鴦二十　鴫廿一　鴨廿二　鷗廿三
鵯廿四　鵰 らうせ 廿五　鶏廿六　雀廿七　烏廿八　鵲廿九
鵄三十　安拮卅一　秋沙卅二　やそろく卅三　城鳥卅四
鴉卅五　伯労鳥卅六　鶍卅七　山陵卅八　小陵鳥卅九
四十陵四十　鴳四十一　増子鳥四十二

火焼鳥四十三　鶚四十四　鴫四十五　鵤四十六　払菟四十七
都々鳥四十八　箱鳥四十九　水恋鳥五十　貝鳥五十一
佛法僧五十二　啄木鳥五十三　木菟五十四　梟五十五
好要五十六　鶘胡五十七　鸚鵡五十八　あとり鳥五十九　椋鳥六十
鳳凰六十一　鵲六十二　うらのしけ六十三

藻塩草巻第十

鳥部

○鳥　一　付も外巣

春鳥　秋の小鳥　もゝ一　海河朱洲之或云草鳥とも小鳥の事　と云説万よりしうけ也　鶴一　より

おきつ一　むら一　群鳥之則り　うけ也　すゝのむら一　万よりしうけ也

あり一　ひろの細江水鳥の　ひなとも云一従や　ちとり一　又ひるの一　宮のりかれ　まろ鳥を放つ

とやをとりあるをあるく鳴　ひな一　いにしへは宮うせ給けれ人は　まとらと云事もあるよしにて

宮れをたちるとあり　とく

一ぞく子一　或る鳥のあとさく　この時は只よ給つのとりやとさく

持や従鳥の詠る例とさく　是八雲御説や　故お多の　又是説かいつを　もりし千鳥を百千のとりこ

うらひをもをうちさつしとより　此定やうくひすとむねとをつかへ古

今かたのことあり　百千鳥後り　百千鳥一　同お　もゝ一　水一　河一　う大一

無常むくひ
戸をくる狗

あけ｜｜のあ｜｜おもる　めとわつれ｜
八對をり又或ハ本まそめ　むさ与るや仙雅ひそむるのいろをも字を
わうつるとそとの字ナり　花｜　をとゝひ揺时るや何花るをす缘ともく　｜
のく　○とりの子を十仂く十末り　る羽をうろすぬひ分｜
さぬともうい二當すうても
○せたのわうりおうつく為田上ゟてうりかとゝゟつを日本記ニ云く此る
云る王子をせたまむつめ乃ろの死後にそて宇治まてありむかむく
ねくうの｜　孫くうとうる｜　孫くゝをともゝぬ
侭｜　ねあう　まり　水｜此ゑうふまもゐる　水｜此下や
すのゝぬ　夏うるを乃あし　かゝとをくをミけ｜
なもひを　雨あかひとそとを　ゝふきを羽すり　あミれきうひ　○るミくゝるあ
このきうひのう
ひをたく人と云ぬ乃よ示よみうりふ永服云るを　くゝうあくのきうひと
そミけとく扎あ尺とひるすりあよとも云あか　阿ふせ云るを　ゑさう
えよりひをたくよ示ふのく　○ふとつのをく
人をみるとえく　さりとそく　をくつを乃仂きさ　つのつきさをあ盗

らん雲海雨かろ素のわの建はそくり
の作るさとん素をそく仂山くとそく　あをあく　をそくく之數字之又
むり是まむ　あそうわおはとひ相せ
は同る死　のゐうまうつ　孫うるや　わくうの｜をおよろひ
あけし　源氏之かころふとん為れをそ　とふくあのきこゆうや　｜此のそともけゐ
まあくゆ孫ふ侭ともを　羽のせ　ころさんをそのの
をふ氣入り　羽打や又云　羽風とふく　うちきふ氣　羽をそしく狩之又云　羽風のうすやともく　氣
あく　来鳴やけさる死とよめ　侭を今朝来鳴や　毛をのふふ　毛衣をつる　ふるを
若れぬるを　當たて　之　巣ゐおゐう　巣くふ　きり孫　當时る　之
鳥示あくきとものを　鳥う人扎や　素のくくく之素れ　ゑをそれ伺為と云ひ之
花鳥の名孫をむ　えまませ云み何　の名すもひつし　をく｜此あれてわ
あ氣文むきさる　万　仂くの上ふきぬてあゐく｜　とゆ

らこー　○冬ふり兄源氏やのてしあきぬらん　わうこゑの里ふむきてう　ちぬけー　ちぬ
けふるき氷ー　ちや瀬ふあらく氷ー　あふらふ
きのうむらー　さそし待う　続○うゝたきふきそち匂祢とちめ八　へてもらまくほー　き梅の花うふ　万

○鶯　二

ちり鶯　春山のなー　万　春山の霞ふ海とくはー　万
ー乃霧ふむきふ　又霞ふむせ　ふせあり　花ふ待ちあくー　ー　れて
掉をふ枝　ー乃ちつらひちらを梅　万　ー　のなたち
雑を志花　ー　の祢くうの枝　うくも待く　けふあり　花ー　ー　のう
よみの兵ね　わの卯花　万　山吹の志きことひくくー
とひらくとへくくうとふ　ー　れをと字ちむゑふ　万　ー　れ者
後、死とふく行可為りや

のあや　みーゑあやをうち鶯の　つきさ山とちちり　ー　れをのからのふう　啼二ゑ、
ー　の初なりぬふ人し　清少納言枕草子　ふありとそく　ー乃こ初音
行涙　なみくとん出たくとむよつきくのすや又こそ行うと　うそつうふ死志きそ鳴よつきくこれつうのとうそるを仍つる死　ー　れを
祢しろさくよ室を梅を待く　万　たきふらりふ　梢ふ鳴け
囀る　う○音を出くふうれふうらうくひ　まん死さしやとれありちやそり　人くくとつやひしを
うくひすのなくこゑのるあれりくふ切なふなく　ゑのくくとりふやうふ気二ゆうとちり　こゑや乃ー　楽府　上陽
人宮れ鶯百　囀愁厭聞　世をー　よせうつて○つうりをそーこけのふをさ戸よ鶯て　あみーむ梅のうやうつ為らん　○鶯はぬ中の為れ巣
なれせたくうる祢をそれなりぬ嫩々り　たみうう巻とんの中めきうるるや　ー乃巣待うる枝をた
たぬー巣をり　すくうし　松　源氏又松よもくうとちり　つくれせ鶯付るくたへくそ
梅亦ふすくうく桜ふやとうをねくうをんや　梅亦や桜をまきそねくうとせまとちり　やりのさふふく　山音こ　こてと

とし又一説野のかりさに なくとよりきてするなし はるをとりともむ 求や 万 たちわかれ

雲のうへにわひてなく なれてうつろふ 春れうく

孫にあく 物うかれ孫にあく 揺う之 あはれのくれ

て鳴 万 朝霧のやえ山こえて 是営のうすと一説之八雲 此説を附るや此定り あさ

あらをあらさとよふする とりけれ 万朝不き 榎のこさとくうと

り色そ ゆくれう色に色羽うちかはく 万 青柳の

技くひうちて まつ菊乃行の抹に 万 三月とこ鳥

営のうすやとかくさ抱 よ作う営之了為 花見鳥 ○春へそや比おすわゆく山さし 乃彩よきてあけみつむ見る飛む 匂ひ

鳥 ○山さとれ営さしすてよ白ひる揺へとそきに孫をひく気作く 飛む

○燕 三 為まうかるとて来物や又吉日をえらみて巣くう揺やされも しえ日くらみ作よあつ死

ゆき先 ゆきくるめ なつひさむ 丈妻れる説言物や二 人の母もたさらとや

日あき鳥

○喚子鳥 四

よふこ鳥 揺とひせいうり又康をとひせいうり不用や此山に此鳥ありとす 山彦之又云ゆく鳥とて山にあるかなれぬすしとえここそ都の万 にゆくと云詞よ喚子鳥とうりとえと又ゆくと云詞よよふこ鳥といふ其を 鳥をよふ詞いをつくと云都やとえし又此鳥の事うりつき右と秘傳あり

孫ゆめの あうなし されし わまし 乗ゆりきこゑ

人まつよひれ 拋てくの よふ又当 朝霧に八重山あらて 山さ

とふされとまさこいし気ゆ乃中山 清孤山う

た聲おほ清り

○雲雀 五

春の野にあさりひまし のとこしあくしれら
くる雲ゐ入るとひさしく見はるかに 霞乃下
風ふかれてあらはし子をはなちたる乃
と野 菫叢にとゝ

○雉 六

きゝす 天の名にあらはれきしとしらとこゝしと もとは日本記にきこへしとあり 雉子ともいへり
ゆかしく 桐野かりさとなくとも 雉のちしく 深さしまたりん くる山にやさ峯の しゆとよみ
八雲に又きゞすのきゝすを先見しとあり又きこえけのするしとみ わさけさ雉をやさけの雉とこれあり 雉を恋たけきゝ
さの しあさ
これしのうるあと 雉 食物の口むかうふるやとこゝさの字をも みくよむや 狩すもこの行會歎よもあり
さしのかふ 声 壺く 喝と

よのんうちかなし 天雅令日神此國にうひゆあしかのの国よ
そも日神無名雉と下して み雉ふの比山にしし 下給て吋三年中にて是非のたへなかりし 天雅令比門陽律徃来を下はいまた
つけて掉女あまとみくこの名を地神の子をうくいなる使やりさせ給へとや
射と射山矢を天より持て下給しやらやこの名のむ孫をと祇至天へ上
日神の比前み海さりされて思つかなりさうひ歳とちろめして此矢大切之
つかさへ勢をもて矢の上よりかへるけくさすこの矢天雅令のひ
れねしてあとのけふ伏さらむ孫よあさつて忽に死ゆとこし
島 雉男名之鹿とよあり かよ
はり又おの名せ比 うつを里
わりふそ雲雀之 名轄を 潟章島 六
燕名うときこえとより 雉よおう 去るや○みよりれく山のうつ里
なくあるよこしもなれようしこそ
うあくちとらけ里して喝し さとるひあさ
里しあく あるをしのさしれほろく なくこ
たあやれく 雀火あけしろかみし峡く きゝ
きのひふ ○子と衣ふたとさちのやまうりうりふ里とかて 弄く きこきうれ

○山鶏 七

よろのちけ尾 さし尾ハ鶏のそとふや 俗ハやまどり抄とぞ世話 ちけを乃かく
ミ

○山鳥はとりのちつをはうく見うけとるよつゝしそなふよそまけめ
此うくうの鳥り後れらくる見えしうらしともろしとかつの国よ
り山鳥をそてまうりてまくにしたるうしてきくをのうへと長とあり法
門あまをとしてらい法ふさうまる事するあまされ女法は此山鳥ありをた
らん人を告ふたてんと作ら逢けまを持こよなうきんとし法ひろう中よ一
人の女法友をえあれく鳴ぬ身あうと相りひてあきうなう子こえを鏡の
内ふうけまけれんよろこびつうけしえまそし鳴るをしよりそくひろけてう
うミれたかそふあてく鳴るりうまよるをてこの女法ぞさえまね尤らひけ
まみと山鳥を被る唯とん必常をへたてくぬれや哭まを至り人雄の尾をもた
けて見うしてミれを唯乃わくれ尓のみ白骨を鏡と云世あり見と山鳥れ尾
の志さま尾れらもよあれを山鳥の雄の志さまれとふへうへしと古人やうく
とうや常をへたそく被ハ唯雄独ぬをる鳥やされをひとりぬ家むりとよきとく
らあろなうへし又この前寿ふよそまけめとらんよう鳴はいようとふ泪くよそ
れとしもうされとしもあうとか山へつそえ骨とひるや鏡の訳をとてなけそ山
とり鏡をミて多くとハやうくなは 夫妻山の尾をるさそし
よれうるとよめるなるへしとそ ひとつまめく てぬ骨く見そへうるき

ゆゑあるよ
や しらうをお乃上よ法さこひまそかとい
ゐつましれたのあさつま鳥しれ尾乃海をかくえ

○鷺 八

あら鳥 法てされさう とひとことく あら鷺あをし とく法ふよそ れなく あ庭し
つんとしし の蓑毛 うるけ を読り みれくうさ法り さえとるけま 世法きのうや
よふしわらし し年あろ をくろふさく白し
小時や ほそひまれ し法ら山とり色つま 法きの次のけ一む ら左さうそ女房れ
訳よひまとて法うりひら抱あり うま尓法さ家らやとうと しろくひあとろんと 神楽 や伊
さなれを利神楽 のあうり法す お迎し 万 しをく てう 呉浮海 し乃村鳥

○鵜 九

海鳥　うのまくもちまきおほまをさとらをむられてのとやうくもろをはく
けらまさらうそての森よる鵜多くをむしとや去るとふとこり　私云戸
しとうも鵜をとふる一定の但せまりふ間りくこうりろれも海とらそりしをそ
きし乃戸とらとふ之其鵜のうちふりすとうとふりあるまつまく云
但之鵜乃ゐるゐえ　あら海なとふあるやなうみうく　去戸つ鳥
　うのきむ岩よあう和布せとり
大之　はをたてく　うはをんまつとふ鳴殺よつりふるや又うはの
　去ふう多けまさうこなりしさらハ大ぬ柱字
治うきえ　しはふくはそ　そとらはた　しのきむ岩　あく鴻とを
はなとや　　つとこく　　　うくまり
あうう於せてとはをさのうそうね

○時鳥　十　依庚鳥鳴と見えたり

初時鳥　但宗祇法師云未方よ見えしを
　まるのまをすまりし云と云し　山しと紀の鳥　去ての
たとさ　たとさ鳥うすひこ鳥　並二なう　はさこひよ
　ゆへ之　ふ
せ　のとすくやけう名を　ふよせ　いよしゐあふつ鳥　は月の

鳥戸よめくさ戸てとふ見　是ほとしきを　ぞくすむふ　搗を歴とる見
初為り　○搗の林とうしくむ時る夢ふ冬まそてすそわさう　鶯はうひ
　うふ万搭逢まる其搗は枝よなくをくよあり
あの中のし　鶯のうひこの中よ一鳥と云しちくた邪云や　しをえ
　毋を鶯や海しとうをとりしとを去子や
めくをとよあ見　後撰
はなまつ戸を思孫とい鳥見　殺そく鳴　殺な紀
　卯月ふたてをよこそとりふ於く
とし法くなとい鳥見　あことよ見　をハ時鳥をあこときとと
　見て明年のまつなう
きんとふむく万ふ邪云鳴とろ
くなうあ見さくまし
　しはさこひ　しこのそうくれ
しはへいめる　後撰　こ上
あふちみ枝ふ抬そてぬたとい
鳥見しこ乃戸たらくくとい鳥見　木つくひるくせ又云
　木乃面をくれうせ
えり　たは孫　たは歩去のひね　たはりふ見点を

哭 さへつりへ里なく（まゆつき　うちあり）さへつりそへてなくけり

うくひす ○さへつりへ里のさまをはかるけせんとしきを二四八ともよめり

らし 或ハ八雲御説云 うくひすのうたかつてもきゝしと伊勢物語

又もしめてきくせよ 袖中抄云 二四八と云 袖ねと云るやうまを鶏をそへ八声

のなと云八 おなくゆへや聲に八 おなくよそあしを暁にて初音中の名ある八音

とそ 三声きゝ鳴はいへ なると必八 しを鳴や されとも此中をきゝのおくよをそ

てやりのしるをかそへねとよめるに 三四と云を八之八といへやりといふ字の

おなれともあく 八家とうり へつや二四八と云やつの聲と 此へしやつの

声へ又ちゝねと 此れや行ても常のことくちりへ里ふくにめり

初音のことく云ハめつらしくとも云 とちりへ里とハ万よりも百千りへつもと

そうけ里又うし こゑゆきあしへ うたまりくとも云代を得れとるきをいく

此言ハとちりへ里の名とよまれまらハ いつれ五百と云うすかれ

る百千返の代をこととうひぬ但或書に云 時鳥ハ山をおそハ三やこを毒と

ひるあれハとよみくとも那に鳴とよ さきとうりや 私云 初声と云義おり

やつり持はあ海里にまたことに 但先年に大和の舎士麦葉まつ孫にあふよりや

僧しもみく中 おそな葉をは此定につねの義をそやけ建共おもひ行なしみ

とちりへ 百千う名所と伊そくいをハ五百と云 百千五百とれ

みうる数をとふなるへしるたうふもいふ鳥うすとうと○

るとまるも先生時され所をつくよみなうん 是ものをとらん 万 かきらさ

すなはなく里（なはなくとハうつりの鳴や万代とうきく　なはとよむ長なくものあるを波り鳴や）あくら

鳴（多鳴く）擣鳥（或云）くきら 同 一あり声をとれ 秋風に

萩咲（万）常詞鳥 百声鳥 よふこ鳥 玉迎鳥 又露

鳥 田歌鳥 早苗鳥 菜はく鳥 賤鳥 たそかれ鳥

いもせ鳥 あやめ鳥 鶯鶯鳥 うつき鳥 はく鳥

鳥 めつり鳥 はゝき鳥 夕かけ鳥（是ハ霊鷂鳥時云　なかハ夕影鳥）

ふけくやし（指迷 ○やよやまて山　ほとゝききにしつて）

○ひる鳥みるそあり はくの時鳥

揃たりふ時にもなくへ其の抱り 万

むかし迷高帝にしろわひぬとよ此鳥ひそ地藏十王経云閻魔王宮の門前の樹に

ふいよる樹に荊棘あり死鋒刃のことし二乃るつねにまむ一をん無常鳥

とえうけり二をハ抜目鳥と云つくいまふりんちうにに此里に化して鸚鵡とす

里そ法語をとしめぬ衍那蜀寿となく此するハ其のことその家今をさらす

ありしと云さまさうんちうかの里に化して鳥名をうらて法語をとしめして

蜀薩伽となくこのさえそやさひきくつまそ今つまうんともとそく

御なよや渡てやたのしまでとよひ給ふ時爲ハしての田をさしていふなれハ
此世に我すまじきとの我をよくかくへしといふ由のよしつてやとなし

しでのたをさ ○いくたひくの田をつくれるか我ひしてのたを伊を
あさるくくよふきのたしき田を継れん我かく
多の我ふをよふふうしをいり又しての田をさとふ時爲の一名や時爲ハ志
ての山よりきれ農をまくむ時ゆへりしての田をさとひとよひ但しての田
を伊をあさまくくよふと云り自の名をんよふとかいひくる我免又ハしての
の山より来て農をまくむ時鳴云ハ時不換とみくその我をしきもと云こ爲
れやとぞかり我まゐての田をさとふとぞし或云してれ山しての田をしまて
ありとよしみふわりハまそこ而とぞり世に難名ふたれハ不及沙汰とし又
我とくこゑもすれ名とふ
あゝあるとすの所に侍や

いくくろくさう すう御方
我ゆくーしめとせく我う あまりつきち侍て
きくろん こうみめつゝる こゑちして涙を
思ぬなと讀り一聲出山より入 万 一声く羽毛
ましあく古紀わたる一所うちを夢 こまひ我
古紀とちちまで さこわひさまるー 我の毛をたて
てわく鳴声ともよめりーわくしてうちれ夢
そうや我けあるる年山のー 新六

○水鶏 十一

さしく水雞 其の名也又源にも
ささくとも云
ーの我を名にしろこといひ色
源氏○まきの戸を扣きの水鶏にさくうせてわかん君まつ時なるうな
御

○雁 十二 八月柳の末に風吹時とこよの国より来て二月に帰く
といりつそくうめよろとや

雁の孫 ひつ 玉章 をいー翅ーうね をいたーう孫 ゆう
羽のう孔をいーの使とよめりき 九月にも孔ちうりといへしとうと捺うりの使と
云ゝ事ハ蘇武ようくしをあるやさう出れとうけて云つうんとよめるとこの
山さみあめハうひこの射とるされさうをりハ翅うせとやつきてうち子をそ

らへの御使の玉章をつけしもめづらしやくきるすとかろ　わすれなし
くの字を書ぞ是や雁に不限使之と云し
きなくしり雁　つきよみ　あまの渡りひかりの海
見　是をいふ　うきくもにかくれ又伊勢の　かりの玉章
く　あまのちはを外せて伊勢の海し　うつつくれし
ゆくしかくし　渡　の海にやかこし。　のくれ　夕ぐれ
落し　ゆふし　の波たき　あまとふし雲井見し
り雁　わかれそ　きなくし　あさ霧てゆきし　見羽にむ
○わかれそ海にあさま夕されば山
鳥よこ雲わかれしとも　万
まひし文の落ちてゆくをうち糸のちの閑せり　雲をそ　わかる事
やかた家宝とひ　二季鳥　○かりをとめつれそへ二季鳥のかし小海
とそあるなや　そしひゆえ糸へ飛ん悪き音之　昔秋来よ

よつてやと
友を飛む　かりねの海と紙　お波の音の　とどまく　見一つ
らとみくらぬ　深きをとくらぬと鳥おとよひ見ハ　見よまさきりまゆらぬなまおり　見波こさ
のわかひ羽　川の帰船のふと物もう沙たき
○秋風にふくとおさまあきてくら舩によまのとわたり
まそあらたら此音をさむとゆく清きを鳥檣とつられて
とひ　漢にもえりつ飛をと見
たらぬとふむも此也之　しくとかゆ　後撰　渡しみされ　しのわと
志しり雁とそよあさ　つくとをれきぬしり雁
たむおりなしとふしあ海雲の面海しあし色に
ねふるし　万　とくらなそ館しの子をたちい
夢を霧をとひ分てくるし　つれ色うし雁の宿
○鶺鴒　十三　漢云和名山多令鳴表面

まさしき二字　又伊しく紀也○ゆらめたよ霧のまよりみえし紫の葉をと
まつうちそらふ庭さし見ゆるが定家○ゆふぐれかゝる所の
へのまへくしうちさらうすき　夫院もしめを継母るといふ
すれんくさゝるゝそ　廃達　いなおほせ鳥　非説や大和物語といふに稲負
けていなおほせ鳥のなくといふ庭さしきの條めの庭よりまさりたりといひ
となりぬうちとま○いなおほせ鳥のなくすへよりきふく風にかゝるに
なりといふをとのつまどのなくむなしく　一　但定家説不正説いなおほせ鳥か
かゝるなく時人の家にまいり○をかひて入や仰号之曰かく記日なくなる鳥と
いふ又とりきぬへ　なるといふ是又とのまくれい是をとこそゆるかゆくへやと
八雲御抄にあるに○あふるゝをいなおほせ鳥のとし　へまんへを忘ちまさ
とへさらまし本達にありて庭さしまや　とありさかしとすを此言のむまそゝ
庭さしきてえしらりみといふ山田よりやあらつえみとくよ鳴るなくとあく又いふ
秋の田になくなるまでにあらぬめ○ふる紀抱りとりきさより又いふ秋の田よ
むまをむるやとらしあまりをいふに出ゆをしえとふをいふをいなおほせ鳥と
日なく又かくるへまとしみまくりつまに　いなおほせ鳥のあり
いふ泪に同じところよといふひしとあく
まをくこれハたりといふなるを　いなおほせ鳥　新六
まさしくらめの見とあく

○鶉　十四　秋の物也夜をも鳴也但昼をかくる事もありされ共夜が上
ハ秋なくとえしより

うづらなく　まのにあり又ふかくさうまもとりあつまるまうしてまめ
又いにしへ野うさのうちの入聖あらつれまよめり
うづら秋　みづ仰あるまや　素十
八巻之の西に作
なる　説也　しむまを　うけし　　かとこ　言ハみしさゝうう　花いまさよめり　小花
鷹狩や荒ハるうそしいうとすんで景つまくなる
まりつ秋風よ尾花のまとのうけうつら袖ゆえうへすまみくうりへ鷹飼れ
用なこれまてあつさうう

○鴫　十五

鴫なく　鴫をまわでくのぬくや秋のをしめよりなくゆくうり鴫姫く秋と
いくれなし雨なく忘の心にいふも○まかしさをたつとの方まを
さしうねてそとふく秋のいゑさつ阿やといふ言のむくと八雲御説や又あく
抱よいふうてをとろまそまてそとのまゝをとまうやうつてを秋立うるなれハい
なり必忘のむよあらす又いふ山をとれ秋のさうつてまるけハ秋の山人ハそと
のさ孫をもをあそせくかさすうとも也まう一の康まうまさんをよあふと
ても又人えり康ありこあう世んと思ふもをを合てふくをそとふくとふ
とうく又ゆもく人の山ちちるうまそ末をおらけてうく我くをれさゆーゆを
よいさて夜ふあうれんとなふよをそ紙姫くとありちのまハ言うをま
ゆーゆまとふめ又いそく秋のをしめそうこうんとそとそとくまくつてそ

とらへてくさりつなぎ綱をかけて見ればいかりをさしてうくれゆゑそとの
戸孫をしておのをとらゆるありあまたをいふといふ説をよみたるをとらむとて鳩
とくゝつまて鳩の戸孫まちゐるもありといひしあまた 二本乃杉 こまたいく 山し
いとをまちゐる也或云鳩の立杖より鳴と云なり あまたは たかくとつらなるをとれ こゝにすぎさりけり
しれう流る
里のまてあら孫ともをりうさしをゐるさやといふこと
めくし鳴し ○古畑のそまのたつ木に友よぶ鳩の声すこき夕ぐれ古畑を名所や 鳴鳩喚雨
とり鱼(?)里 をこく聞ゆる山しれ杉 こゝりき
しの獨なりふ
○鷺 十六 鷺狩は説鷺のまとひにまかりゝとるゝにとあり
あまた 趣なく或ひるゐる鳥とゐる岩にさゝまとらふまし云説さ
たし鷺 れは寒よもりしたるのとりつく山とよめる鷺ゆひ共をこれは
見ゆや但それは云へ 志白鷺或ひ眉の白といふとなり
せ只趣あなるへし まし流乃し あまた用やたら木いの孙子細きに
おとひは志白や肩の志ろ 志白舟くあまた
きそは志流といふや 渡志らふれし もの白也 さし
羅くれし 是もまし羅小の鷺同なる也 志らふの毛し あか娘の
娘とへの同音先といふ
しくろ小れしわらし あかけといふを同じく黄鷺とかきくわ
たりとよあり鷺のひのなかひや
やりたとれし 八雲御説よき尾のまさかなりしとあり但是は帝の
ふちをくしやりて押しといふ尾の背とりりてあらう
ひて渡ことも小座形小似るといふや袖中云さかりとふといふ
物のあらゆといふ或人矢のうこ小似るかなとみり 山の人まう
たり魚つまとろり魚つま とり魚つま とやりら魚つま
こね 本よりく所也五こね つられのし野流まのし 杖過て冬
ときへ八十よみをとらく とりさら
鷺といふや是をわりたやみ
あまた小鷺まるあるへつを あかし 鳥や出のし 七月十六日也 白尾の
まや又白尾つくともとり是
し 鷺網の口傳に残書のいて しの恋忌 夜也常よわするまなかれ と云同あるらう あ
まくりまゝの羽りゐりといふと
さ まくあさうりとりふを同るく 言し をそろわくら 言山 巣の山之そろよそ
なしとみり
ゐてく 鳩やのし ○出羽なりの平家のみたりさち帰里歎乃さめまる替
もゝらく此家のあらそく黄お羽のひらりより逃ねる

又とてかくと帝へ奏す此たかちかれしく常に八幡へまいりて鳩のいくらも
ありけるをとりてつれありけり後まで鳩をたりしとつれてかせけりを後
日翁をさそひ此たか内裏へまいり遍身よちつきてとりを後月をとゐて出羽
より渡を仕けるハ其年大裏へまいりせしまいりの巣た後しのたかより
しか子を又ては母まゐりよくきれさりしかを年の比此たか鳩をつき
てお来より此母をもさりにましのをむ山まへて鳩とあひともまに此た
かましをくひころしてかをさりとやまきのちりく跡なく鳩も八幡へ来
ありたりこのたかをそのくちなとやとゐつけさせ後て鷹飼まあつけさせ
給けるや　くちとふ　鷹也 松云　くちてふり　なし業る　これを見　名也 蔭云　こゐ鳥
とある
同上　後を後かさし島　を左ふさのかす　也 蔭云　嵐風　をもてやふされ見る也而　周る百首にまさけ…くを
ちくるとよめり　とまり山　とまり来　又ナき　山　本居　とのみ　雉の本　名せ
後も百首内
○共用ハへし又うされぬりしたかのしそひきしらあむよハ後ホへ走りと
あるをもしのすやへをえしくて放けぬとゐやむよハくそすてしぬを世
またこ為のさ色　ちふとり　ちむるさ又り又に為をきして草ホ為のう
をそこうせ　くれてちふすとも　あ狩とん伊へともとて
むさし　たまき　をひとし　海をう爻のそ　さと八歳よ鬼の岩
わかり一とに一文字

まとふとゐや米山のとよめり米山ハ交趾の内乃ある之○為ふくろの巻の
うしらゐのくひ肴に世しし若敬なり○為もなくてたかのとにそれ額の
毛とかをれましまあとやう道にかゐある時ハ鷹のひさいのけかろくすり
てうみかく後やうき時をわしつまく吹て後くけうゐ捨之るをとら後とゐす
よ走てちるとかくや松云此ひさひのけ
とあ道よよりてう道へのけとゐつくさ　鷹れ尾れたすけえ人
のとり色つ又　たをけハ　あそまりさ　征えしめてあけり
そのゐし　たもあし　や○為ふくろよりまうれきた
れあかとかゐ為けしてようすさ見とそ捨ぬ　さしてとん為ふくろよとか為
とへさかとゐふかさときゐハ用よさしぬや先ふく無用のことをすてぬし
あるく餅袋を人のかくへけるを又常まをとあ為をへさるハい海りるすや昔
源正叔か山の色よ女と思なり跡へ出る時後女のりとへ我とそて為畑く後を
遣けれハ女鷹備とし々りあつ時為袋かり者に遣けれハ女いかく思きん○の
きしうつましろのよりの為袋にとあ為をさしてうへし一つれうかと評し
てとしけれハ鷹やかく死けまう道より找ふくいむるすや又
のきハうつとん羽をうつやとあり我にうへて人にのくむし
うちものうそつへ鷹羽つしと後爻て　むてさむ爻時ハ社　後むき
うつくうそ鷹とん病あ道ハ薬を　とつきく人よより
飼るやうとあ薬を飼わやとある　あまりとや畑ませて後

かへる　なる鷹飼なりや○かりわひぬりしそらつ気も目にみはなれ数山あ
さり大ききもなし一数山とん狩人鳴る家よ一不におもはせていとや
なしあひて数ミは成るをと云れりしたうつ気とんつうに狩く子数山をとちり
山とおせ右説之ち所山とん帰山や家に走え也く夕にな有くりしと言こひて
ちれ也く是も同也く○かさやふにむすびこれ
とも一へとさしんひを去らぬつきのわりたり　一よりにとまう
ふ　一度あそまかやかりくさとせ　うろとう　いえとま
くらや小鷹かり限れ　ゐりそ鷹　とうく
只一度よとりた　菓とまれ　なるを菓みれいをとしてなるを見るすしてなれ落
其や大鷹に限れ　菓を鷹をとをし　とし為菓とふは名る之所をとし至
所や又菓とる　なさそれわかりなるよくと
なるれよめり　なさけむの歩　よそふ所之大方三声の狩や　ぬます
とつ鳥　是を人に見とぬ猟よ羽音をたてさしそろ　めとまほくえ
ともやつかまでの儀や小鷹にあるんてりを
めなるまいて子をそしして羽よそそぶにあるまてたやきくとらわくや又まむそめなる
者味あるにあるまてめとりよつなた之きあし一気ふりまひとよりうぬ鷹之○なる
とらをなるそりさし一峯きりにそちりてこゆりたりのそうきそそちりて
こゆうとハなるハたりにうくれんとうなさこうなさへ峯をとこうまてこゆる
とたまもとりにまさりひてこゐ所也く走をつよくとふ时狩うきをそそまる
く○のそめへてそやれたしくと放やりとりり何そ狩もひかりねしのそ

りなとハなるの走りしのそくくことまとと　終もまま　菓よ落てあり
も鷹のわまとりをえつけさるをとふく　をハまろとや
や○たかさんの角の挂ようりりてや所あしのさへよなるのくらうんたなさ
きそ左や延表所門の所时鳳輦の左の拒をとまて所こしのうちこそ鷹をとを
へさせ所しよりそれ代まて鳳輦左の拒あし鷹の左も手先右も动らりとや
と又左をさしさんれ○あるまの左を気たりしつまそうま場れ所鷹すん人をも所
たあすたさしきとも左たり　秋れをあのま　よひれ海にき
ぬきく但払ふあま鷹や
きぬせそけま　清そそりのつま　きくふとなるまや夕に字菓まると
とそ鶴のなくとまてまねよ狩
走て合く仍当时もおうまもまゆ有たくよるまあに用や又なれなるありまをといも是
もまや○豈の上よ上もあさもとも向をとさて今日のうま場の神まうり行く
なをとりぬれハとまのうしろの毛あ掛かひをとりあさけとそ尾のうへに
あたとふ菓のこしくなりけをめえて山神をまつ所るや大鷹小鷹何もあり
鶴よりきし　わく山にかとまつたへておさもしはく
あととふや
いて山とん山の奥よまをうへりておやなるさくされそ
出つへつまろもへて狩や菓としけくうちまもれや　をもれちぬち所ち
うつりそをてもの起のこしくち所とふやたりのねにうくれとや○犬うひ
れなりやまそゆくりり声をとするさるきりそいりてをみるいぬうひ伊ぬ

のかりにひとつてゐるのあるを志りてあとをたつねくようくとなくこまとや
里声ともやとらし○いぬつなくもくぞと座ぬと乗く雅に木ゐるとりに
あとよむせつなくとくへなるありと伊ぬの志れ染之なきんなくて木より
れや是ハいてゝ鷹にたされてあるを又り里人をおしけく進によりてきん
方なくそ木よりありつゝ木にみ落すりひ
てハ鷹とらさるや能く射てとともと也 たりとかり 是勧ゐり里之是 秋完是は後百首
のやそてをすし○とりぬつてゐるをそれそをまなけらへ行くゆきとりこのむよ
御山かんへ里こうの方ハ木にあるなるのうすやよりをなるもたなうひて木にあれへと
らまさうや恋て行るとりやをとけれ人りくやくとうとい私よとりぬへ来ると
ハ木なる元ゆきなりハ行なる元○あつハめくぬうく里にあるあつたりれつるま
のものひぬ我あしけなく葉に添しきとあらむとやくとらへのかたち
れすと葉 大た くうこ 小鷹付我 小たりの未里之○のひ座うしあまさ行り まのたりのる尾されとされてくひなな乾す
御水鶏礼私の未なるそさうこととくよそくくと飛姿之私なくゐるなきとようつ
ねそやめまりく但とふとふても同すなりへし○あさ明の霞のうちのと絵
をまり白尾作りすそれのけ尺まし○白尾つく事一てうの院の御宇和華の
そうりの時鷹古山と思出く気文あしりけ里けれハ源正教つ上尾二ときりて
白きれ不てつ氏なり鷹尾の上派白をさてまとを息ていまさく当れあつむあり
ならり流門治不義の時正我○二月の志うれの當そ志うねせあろ戸うせよた
つ添てそゆくしと仕なりしむより白尾也とそし○むなくましそとするま

山風に又みえなるハきくとをさくめす関すへるとしもやくねとりうさとハ早頸
に臥さうなとりう之なりゐるハ時をとりそすあまらハりつまをまえ○まの埜
に同し名なりま唯ありしさりせをとらを尺まし○や○りしたりのこともつ
ちこゝしの一もちりとらもとうぬも面白の羽やこをつちこゝしとハ字を鷹とく
なとりすさこうてるとひこゆうの弁麿をとあむ拙のこゆうやうな おもし
ろをやくとらとこ上是まて西園寺殿鷹の百首の内の説也之
我し ぬし志御や 御もそ面や わをきらい 面きらふ さかひとや 也
ふなりうたたかしのよしと たすうしとハ子 小なおく有りへし
うへ御し ○わまうの方ハとりへゐ鷹とすりなけつましとふまとこ
ひとわまれす乳脂ふ鷹よりへつとふるりをよむそけれう
むい御やとやうゐりとふさるをまて毛のうち之山りゐりくひれ山にそ毛
のうそ御之御まを黄鷹とうまくハりうそのとよむ一番礼鷹や捷鷹とうさ
てをうさうなりとよむ二歳之船とうまくそうへうとよむ魏二番やそうへ
我とふるそわさやうふやめうひとりすせあれせやりらう鷹の鷹うい乃
みへうへ我をふとみり長絲あふ○みりまろ未砕よきそれひとつ私たり
なう鷹のこひようもさん此方ハまようへ里めつとあくろえうおくと伊り
まもたりのうへ御とふハけのうハ御をとりふたうなるまとハりのみてけの
うそ御をりふへ乗や長狩う方ハ仙ぬ方すり然志長絲のよくあつういは

これをとしそふるき抄にもかくきたまへ八島大臣人蔵房とや申をおほうともかくこ所
うさなりしとかけるをそて豊家を宇治殿の作られしをたかへ是と小田にてう
へるとあやとかけるをあまたをいはをとの作りし田にてあそまうすありとも
たりへ所といふなりしすき人のやしんたりへ所としくうへ是を見る地たと
とく同五年也とやをとまつとりなるを似うにもいひとつへ云すりひとろ
まそとやうへるを詞を略してとりなるといふともなるまもりく云こ西古き
〇りしたりのと第なる此山也しぬ志りくなるをすとも忘れいりをましく
ようこれは山にてかなる所をもと第なる所とひときさこしぬ我人のやししそと
やうなるはとやふてかなるにむりなるてとやのみふてかなるをとふりと申き
うれもむ得らせすりつきの所とさこむへ天そ或人の申しへたかと八分
分りへ至やりへ至と申るをあれ八十度りへらんまろをとりへ至と云先と
申分うれもむなるをうか庭すしも十度うへ此山といふなるきふあるを大り
たこのとりへ是と云るまえりろくの京ね中は書第ひ東内志りさら抄廿に
し志らぬ事よゆりけるふうれうたともりてむをとうかふしくいふもとり
とりふ詞とやといふきとり歌と云や云旨八書之とくらとといへたりの称
くしすりとりと云を万葉よ書抄と書てよありさるをとうなる所と云を只
趣してたりのけのかえりをいふとそおのふなる云されへ山第なるをもとう
へ是やまとよあらしとおとよむも山にてもとやふてもひきしくうへ所
よしとむへらあくや又とく伊ふ詞へとりなれへとらちとりひとつきなと
中八幡ともいへとこのと第なるを書之 読様抄云とうなるとんいらくとまて

いつこ共をしてかくれとこや又とやまてうなれとをひとやうへ至とある
とこしとらてつ分の年れ秋まきそりへ所とそんいうなるをとひむねのふ
れよこさ海ふなきくつ大の年をかりろうへ至とろびふのこ海うなりと云く
家隆卿とまてかなれと云年家卿ひとやうなるとひとうなろといひもうの
と至まてうへ所と云く奥義抄ひとうへ所と云しもりそまきこのとや第
なるをといふなすと思ひ侍うよ〇わまうとんおもえうすんりしたうれと
うな所山のおとりみちをとそりこの京まて書山まてうへ
至さらをとうなりと云ときあしきらおかゆうすしとりく　さしさ

天たかさ紀せ云
しさ紀の羽　みえよりわ乃つきさ　つきと なくても　うけれもや
ゆきそえしし　うしみいさうく　のこそまろふ
そうううもそえり
たうけりんてふまてくとい亀づ　侍るや　ろうさ
ちわ山のくろけに　のこそあきけ　の京ふ読り
〇もろく波やけうこうさえと
すたうくわさる　うたうひてもつ木よ山多うか　志のよし
後撰〇やうく尾れの
うれり　抄え次ふくうきしきし　よくと宿よすんうき

にてはくはくらしも万○りしうりのときにはにきんとうまへいらそて
あゆうすに孫すきこゑをく○鷲うひのまうこもこたくよつる児犬のえかれく
いうんかくろまり頸○あそ鷲よろ木名のり　人と手うあぬそ
たうをさしうしいぬうひ人のおちさらや
志したかれ乃もくりとれしうに世をまめくれ
為ともれちるしうひるかこたてく山ふ為る
はうけれし　そらく　彩六　よとうとそてわまをねらまぬ
やうく尾のし蒼葉とあくあさ流うるし人はうを
や流おこうりふ葉とふ伊勢より　○まとき為てとう為れ　山のたうつあ小柴の
ちうきをひこをくおかう○あまくまう鷲よあへうへし　たうのさとよりあ
へうきをうまてしうる

○鷲　十七

うを二ふねわしうれ羽流くをくにやしくあまし

しへ山　仙豆不之　しる住　さる山物之　たふ苔乃あさうさ山よし
そ子うむ　苔と山とおも詠や　とをもまとやなるし乃尾を
見れく　ひうりうをよあつま　こ山乃し　○志のふ山こうさちの奥ようふま
しれうれ羽ゐうやくしなうく○あとうんしてさうかふのこうゐくひうそ
と鷲なうきしのむをも志れ○又をよをえひをるし希うゐるとあしこうゐえ
ぬきしの　をたらけんうれ山志うぬしのをのみ
雲の通路
そは為を　たまふむくひのを子松とをうん

○千鳥　十八　冬の物也　但秋にもよめり

さ夜千鳥　友し　友千とふなくを又とをとふひうえしなとも　とをなしし共
し河し浦しを風しゆふし夕なこし　とあり　なくかいそ
し又さしてのいそ　の浜千鳥さくおり　あくしーの寄　○河風千を富えふれこ志宮の中よちとなくらしぬん

ふるえの海浦よよむ歟なし此哥ハ天平五年正月於内裏関千鳥といひてよ絃
よめるやうしは禁中にも千鳥を又のみん不なをとらみ給へる不おもふさとこゝ
やと
あらしみ浦ふよあそし乃あそふ千鳥を
さくふし 集 ゆりもむ澤万鴻わきと 毎之 ながさふ氣
ゆうタしとをよせふりし是鴻し 沙荻しと絃
よ絃奥やちよとと鳴しとこそくて むれゐるし

○鷸　十九　名所あさうの沼 堀川の院の御ときも浦伏是田的高瀬の
よと深草の里うさゐうろと山の京ぬ子のさく京足利よあり
志紀のふる澤し比鳴そし乃ぬ家し比暮うう見
りうくとふ嘴のはやしけさしこうよあり是まつなさ海
くあらん倫部雜物の書の西よ見又羽いひしきとあり
し比ふし
と 田之 のたの菓ねよ羽也し抱わひ志気 之 見へてよあれ
しうを孫をと松しろ見門田よし ○うり小田の志
きのうちけりよね

扎あつまむしてるをおりとそみる

○鸒鸒　廿　夫妻契老之頴抱

をしれ毛衣乃ひとり孫 をし也とさうひとり孫ねもの
やちさりあうさ物く然とうくい
つうをしつうてあひ浮うをぬし
しうらんせそ
池水ふ浮うをぬをしの田也をとよ
め見も未られゝうかしるむなるへし
池水ふ浮むし乃うきね うきねのとこし乃あく
くれゐよ也むし鳴乃なく とひうよしの羽
風 ○伊け乃よをしのつうきしそそそ 也との床
てつまあうそひのけししみそけしと

○鴨　廿一

鴨鳥しつうみをうみてすとくよやせにつまく相海あり方合よれ
段み鳥を鳴とふ部ろそ○こを杉のふ鴨のうみす
のゆうまきみしすてしとすまや見うれをぬ比方あつしとてうらよ
身秘盛法師ゐまとをこて大那しそ日鴨のうみもの橋とむしぬまくう皮巣を

あしのくさをゆふこめてめくみふらひて　たかみえては上をあり
藻塩ひきはおさらひて行かうやゆふまおらくたちらすとさし　あしの
繁みにくらきをし鳥のやすまなりひてくくよ
ひしの下道　なみをとく　かれかや　しのうよひち　おかきた
くしの村鳥　し鳥そなく　氷は堀江ままむし鳥
宮のうち色にとひうふし　しれひかる　う浪くし
鳥と浪をうしあそふ　し鳥のあしのいやにか
気　し鳥は氷乃実にとちられく　うきをにそた
つまくし鳥の浮を流る　波は下を氷くくか

○鴨　廿二

あしうをまくり氷し　しとまと　とし　のちう

ひしのえ文　香山　文や　氷鳥は　しのみのかの春山とい
為方　万　としれくろ　推鴨の　女や　浪し　古鴨や　しさも乃　鴨　く
ひかつ　為羽色　羽包　とまを孫せる　しのうけ毛　しとおる
舟れうもよ川や○あさかうけあしや是打ちみ
とゆく舟のよそめいうものぬれりしそみつ　うきわの床　是戸ことの
氷をを床とひ之あまいうも　床まあらそ
おうきしをみ鳥の後や　うき霜の霜　又うそけにさゆくみ川の月み　とらよめり是もうをようさら
する氷鳥うかいつま　もよめり○推ち川忠ゐをくく
れうも鳥えそのう為えもとみちしまるり　あさかあしし
あしへまをし子　おう江に　よめり　あししの色その床　あし
し乃をりひれ寄しのうきねの芳あはい　うき
しうきのこ　うものえいこみの鳥也○川うかにして行うそさうし鳥鳥
のりれこみよかとうをとられるん又うきぬまするくう
ろのみのおやまなさ　あくし　しうけ熱　万　しれさむ池し
ろなともよめり

乃はうゑやまそうらぬ ○うをさして馬と云人有けれハうまをと
とうとうし ミをしとむりふなうんし是ハ車乃うそ
てらめり
山河のあさまきこおろ悪わろふ吹らう
まもやらも 霜れきぬ氷乃とこふよそうさ

○鷗 廿三

かもめのうあちこ見れうしや うさ見え うもめ れうや
うみ 松ゑの一 しあく しむまのそ しう

○鶚 廿四

みさこゐる 海やみさこゐ磯あらいそふきあ沙へ名ともあらず
海をやみ○みさこゐる石ふかき松乃ゆふ志ぶをまつら
むかしハ秋にそ月されし名の入あそし海よめてさく入りれをみ人め
けるうゐらふたとふ例よを添ふとふ志り無名さうふたとく入ようとひ
まひてゆうんとまうむとうく就之て白毛詩の一曰關雎后妃徳也關雎と
ハ我翁のゐ御見や此る天乃七十二候を紀て嫁五日一度ほくや然一年よと
七十二度や唯雄あうとかる左退て河中の洲よありと云りさ婦のむ住て唯
之を見る 鮫をしてさりそめて源官の中よありと云此むく今乃名尺ほと
ぬ執すふさる舟と云待合て又云名まそあらうる詠まれうらよをとら洲や
も洲よ松をとうた入ぬれハ掘れみちさらされ ふるしなりて丈てや是
を人まつあしろよよせ さらなえしとそく

みさこゐるいそうら浜

○鷺 廿五 順和名よ鷺をさつとよみ文字や 鷺をさらつとよめりあの

かりさりしあしし 葦の中よまぎれ鶴やあしうらも
ところ芦の中よまぎ鴨之
是なく声とよ わふみ有くむ気

あそ色 のうれとしろさえ うき一の村鳥

あしへをさしてとあれわまる一乃まそろおし

つられそ ろあぞ 村鷺 まふし ひふし白し 霜乃し 一説白 鶴之 霜の内 むきるる

ととひ古今のうちを多くありなふみく又古今よ○あし九象ふそく白露やさむう
らんさえ鳥乃よつのよも乃気にゆうくらあら時そ霜よりきさうをさむ気ぬ
時ふく
光

くらしの雨家とよあつさ 池つ所よふるし さうとりて気 あ後雲ふ

羽ぶきはきくとふよつ乃所くし　万　とふと

誘りや　是夢のよす　一れ春雲ひぬぬに来て鳴ゆくらとこひ　是鶴鳴九皐　声聞天とこひ

るすや皐　さ深く　鴫の毛衣子をとおもふ一夜の一　声もそなたそ　ものつり

つきひとよもねくてき声をそなく　鴫萩のやとえ

ふなし鴫　かしらあるゑふたつありてやわられ　なほ

なつ山のむれぬるなと云〇風さそさくのくさのと　わりのあれまくるこしえてらうそつれそ鳴たち　のまふ　聖えり

よめ主　つきよのひのもと澤になくあさりする

たつ　ろうの子をこくめあされ所なむ　万　たはり

孫　万　今衣乃や暁そそろ鳴田鴫　万　うるそら所色き

鴫乃ひまに一れのいあのを　已上　谷豊　色なくるし所あし

しぎ

〇雞　廿六

ゆふつけ鳥　世中さわがしき時四境祭とておほやけせさせ給ふ鶏に木綿を付て四方関にいたりてまつる事ありと云々又暁になく夕つけの主ひおつそとよめり鳥とするはまた又立田をも読り又立田にもよむ。すべて奈良京の儀也　庭津鳥　八声の鳥　かけ　是夢のよす　又かくらのかけなとよみたるとなけれは　かけ　といふ　家鳥と云也といふ事是説あり

国よりそ家をくだしたとは云ふ　是家のくだしくしたをといふ　うけとん家れおそ鳥ともひとこえ　しあまりくの鳥　なく声やあさくかけろとなる

くたよ　かけ　かけのされをとひ　一乃ろう孫　幽谷関てそ鳥の声ねをしそくよ秋あきぬとれ

めり　そされをとひ

をそせさるるやろうねそそらことやる鳥のそらねそ　一はね　是庭鳥ここよ秋ふそ

たりの山ともとこゆめりをたそうるやそりてるや

鳥たらんハせ　志そし　後ふ子　くるや　とこよの一　〇あさくらや音を

ひふをよりは　是祭るを神楽さに常

世の鳥をなくうしそきくとこよの鳥とん日神天の岩戸にこもらせ給ふし時

神楽をうしておもしろそまらんとせし時諸官の鶏をあつく歌へあきた

れどもひとよとりの　ねぬめし　逢坂山　ゆふ涼みふかく
せしとや　荒むにあり
しの字　後撰　をたもし涼し　此哥　○深夜にまつ一声きき
王ハ又跡しそしけ王　王声たて夕つけと

○雀　サセ

むら雀　文　ゆふ暮の　ねぐれ　春の目のもそいまく　破車と
りつ雀　をしめ乃ふるあひのすや又まくめよく家　とまる
ゆく乃あれ　とうろともりくりうつとん破るすめ　羽とりの見ゆの
ひろの乃てなれぬ　ねぐらにとむら

○鳶　サ八

夏鳶　ともし　孫　くもとむら　朝　むら　や
をめ　みやう　むれ　二のち　夜　月夜　山
三むま　稲荷　やしろ　神官使　をり　しるし　立杜
きし　祓　うちまりくすのみ　鷺　天まち　まや
乃　ひだりくとのかり　はちし　猪陽ふありうすの乃あるを
乃姑白きといふ　聖徳太子御　日を　康のとしおやととし
時也　日本記に　あれ　とぞ鳥
○うきとりふ思をそるるの　あさてすをうら海さぬ人をころくとそなくれ
なをそ鳥とハ大ろくるをとふるすやまさてよとん正ふく　ころしてこらく
くこらくた来と云るすやされしきこらな人をころくとそら事と鳥くとふや
又ひ御なをそ鳥とんのしすれ玄名やとあり又ありむ猶ふ云ありちこの鳥を
御なをそ鳥と云とや猶らひきこなしとふ池て流てうくすとりふれ念をそ
鳥とハりくるくまで流てすをとんれさしくもと云ふてとんふるろつの初よ
くりしれらの初へこ海くともあつさ一ことそく人をこうしとりふをそこ
海々とふやこをこよと云初こ海八ことちの助やくハろれも初の助やよろ
つれ初のたそり海をとくをくとり人の子をもこ海とふあり山のねをを孫
海とふあつまさて鳥のこうくと鳴をそこ海くとたくとふや物くひきこふ
けれハれなきふるこらすきるるとてれなをそるるとそりふくとそハきたるすと
りふ初へ流をそ字書す何鴉食糞とあり万ふ浦渚子あるも○ところ人ふ得

らぢし櫛とつぬきちかりけりとぞやうのきみをもとぞやはさまたけし
らむしとてえ無名抄にいふ○かのすてふれたるをそゝるのむかてうつしへと
いなかの頃らん此家や伊勢国の郡司なりけるもの家に鳥のすをくひて
子をうみてあるしめなる頃にひとこ鳥人にうちころされにけり女鳥子を
あたゝめて待ゐるよりなるにひとしくこそてさりけれんあさたまりけう
いこを捨て此男鳥をさゝけて伊さめりくちらして有るきけれは法
りいこのくらてくさつるになりけるまぬをとていゐれある也郡司道心を発し
て法師になりにけるこうれりひをとゞめる也又一説に和泉国の掾出家して
行基菩薩は法弟子になりてありける時上浄土にむまれへすして契りけるかされ
なそらのかなうりおけれは行基菩薩のうちにあたへて○かしけもみれ恐とぞ
るのてとなみくともとりくてされちいるも此入道法名を信覚とぞいふ
ひけるむ付くに之に此家を本家にしくうつしへのかをよめる歌和泉国掾
と伊勢は郡司とかきたるなるぬ又いふれを
とぞとりとてうるすれ一名にとるし
　　　　　しゑむくひとりへを
鳥出りゐつる（本は鳥なり）山しうとされうきゐふのるすれ
ねべし

〇鵲　廿九

のゆくきの橋（是ハ七夕ノ事ニ七月七日ニ二ルさしてと橋とぞ）しろ
ぬもとひとこゑてあく　のゆくやるさきる橋にを
く霜（是ハさしてまれりけりし之ことうりあるいをあしを）鵲はたまに羽をかはし　しをを
あとめくるとゑや　しの橋をあひのゝに（あ是しのう天王彼あり十五巻）
（神の王みほ）しのよりたの橋　梢をとめくらし（〇月ちうさこす　ゑとめくらさ）
これのようなるもとくぬ身をいりふきんわりみれよるゐもとくぬふすせた
つは此うさしらるゑ由従魏武帝月明星稀鳥鵲南飛繞樹三匝何枝可依といふむく
ことし○かさゝきのつりさたてふあなしてつかいゆるくまぬにわたしうめ
きん

〇鵄　三十

てり孫とひ（神武天皇東征時弓上ニ鵄やぬまれ）

〇家鳩　三十一

あちむら

○山のはにあちむら騒き行なれと我はさ左夫思恵君にしあらねはと此哥をあちむらさわくと海とよむてひかるやあちむらさわきとよむへし此哥の心ハ山のはにあちむらさわきてゆくと我ハ君ともなけれハ所ひしくやとの心也しやしも助詞く称あちむらこまとて日とゑり又あちむらといふ鳥みねに多むれさわるをいふとゑりをひかるや

あちさとりを以す

りあちの村鳥と纔よるとり亀つま打つこまき

の入江なとり讀り

○秋沙　廿二

山きしにわたるあきさとり亀つま　河にぬれるや

○やまとり　廿三

○子を思の孫の鳥の巣の上よりうしろをわひしやまとりの名古神宮の勅使下てうとふやまとりといふると定く三角柏と云極に神代よりてまつ所とや此鳥を物ハ装置を立てところをおハ中家乃中に子をうしてうしろを母鳥此うとふうまゑをしてうとよんてやまとりとにとふ

てたいせつとゑとやも時母鳥のなかさとゑさへつきあひきそ鳴涙鳥のこらくなちうそあり同も涙うくなきそ身のそんまうなよ見れりさをきうやとえし

○城鳥　卅四

すみた河によるあつま　又すみた河なりても只此河りも

あつ白鳥のりしと是あつ京や

○堀江に

○畑鳥さ河に堀江乃河此にれきそ小気井つくなくハこやこるりも

もよあつま

わたれこ濃に

もこに我もゆきぬこやこ鳥　小雲を志られぬ

鳥とそ家く

○鶏　卅五

志とく家くところ雉なる　書ところ　しとり亀をぬれぬなと　中古家人添之

見八雲所説　うゑ此しりゑわめうえうしし校まめて

うつり香 かうみゆしとくや蔵出○くさくハぬ花乃山里にひしきさよ案
贄れのうそふ志くわりのそ○風とりくさみ田中のくろれやふ
うくれうきれのそりふ志とく鳴く

○伽芳鳥 廿六

尾花かすゑにゐなく ましれたちとしよゐくとも
り色つき 三鳴堂のすゑとよめるも ことを乃夜ときさ

○まひ志 左花也
すれ花らさえらもとも抵いそやらん君りあくりきし袖中抄云奥義抄云む
し男歌詞ふゐよあひぬとりをうらひ付て其家とふふよゐともきのぬ
ふう葉く気をとゆして云初家そうの葉のくさすちふあくるとふう里よあうや
ともりふれ ここ後ふゐらぬ色きうしを楽つき詞さりぬ其後むりを思なり
らわふやけふつうふきうりもさくしをりゐりみる雅よいとふなくてゆう
すうりぬつ気の年の春たすくめりし聲ふゆ気てそへし葉をみるよ
家ことくくそひきてすんてみしす終日なりめてむすしくうゐりめとい
ゐりみ歌説もや木葉志けくすりて志うし内葉つえしまとし云他もあり也むりよ
よある方○とくうしもさくしのさよ大うくれくもすれ葉ら氣めちゐ
うきことうみひもをふ云るし詠出の昔よとりてありなうしりくさふしつとし

なくうよ詠出乃くう雅よきとをのちくふ人とぶすをしてよろりの葉比くなす
ふりゐさるよすりしをうへうすとをゑくさして啼るれためふとそわうを
いうくをくとこく八雲御説りも説こあり此說りもやすくゐのくすとこしみ
ゐのすうこと來てのり是ハ詩ふりし出ぬるすことよりて旧依めのるすふ春わて欠
乳すり家うすうこ計りそてゑらぬ萬云比み云らそハ春若志支比もしめよもそ
かをさむとも月吟よ五月節よ驂焰鳴と泊をり时名よ悪や秋そうつそよ方れ
て色ハ依むきふやうくうらきらてそ春ハいとともなりうすされとも春も色を葉
くきとく御事ハみしすとも我ハ気みりめくりとさやらんとこうめれまてあ
さけるう時鳥のくりてなとりて今回五月比をらよりてまうくんとそてすう
しくてうくれよけれハそ里をとふつぬとうへうひありくふよりて时鳥れ为を
きる御之此よひありく時鳥を苻のもさを出うのうくれありくもすれ亦比か
とくさをきくとさく

○鶍 廿七

きえひく鳥あのうちふまくすすとあまぬし よ
ひかしきそてきれし

○山陵 廿八

○山かつのまさきをこるをのゝおとみゝにきてあつかふをむかへり
○このうたをうたふとうたふ山かつ山かつのこのおとうくす夕立の音 山の
らめ 拾遺 冬されにあしこのかゝ山かつとひちりて

○小陵 廿九

○なお猶しそらくみゆれすこうそめのおもかみ人たまみある世盛せいは○とも
かしすこうつめかしとみくもまつわか独りの楽しそ志は○ふえてもみよ
かし人の山里やこうつむまぬお梅のさらしを山へは嵐ふうつ人は
なかめもさくれまうひくらの八数そり○すうひね心こうつめ中しの中
に入てわりなく人をむつれぬるかな

○四十陵 四十

○あさまと云四十からめそとしをあたる冬ことをかまふる汁しの稲と

○鶉 四十一

○ことりわかーことなれてうふねかみぬすつくとしいおとい此うそ

○増子鳥 四十二

○ましこの心ね此くつちそしうちそうひとさえみうくてし若こひしも
○心的あし猶の文ともへしやえこうもうね心てりまし二うふ

○火焼鳥 四十三

○りく志気りすそうさくめよひくさゝるなれうやとりし庭にみ白めり
○柿ひう孫栗わくふうる山心しとなすと心ひしとや火焼たくや

○鶺 四十四

○そく霜ふりま道ときくゝ見てうや
くらのいうく尾宅乃声に鳴らん のへのかやくさ

○鵐 四十五

○あやしくも風よわるてふさゝゐるまえにしきとりまたうくみ白うん

○鶍 四十六

○まれ日れのとうくりのまむ山里に猫あまれなきいうちうの声

○松毟　四十七

○み山木の色かはらすうつりゆきて松をまつたふ松むしりすうかな

○都鳥　四十八

○あまた又所々に描そあそれなりつゝ山かけのつくるの也

○呼子鳥　四十九

或云是ハよふこゑとも又かほかほ鳥とはつくとま
鳥名

○春されはもすそもちせりてこゑれ名くうる山にわかく鳴○ようつハ云てあくるりをしきそこゑハいかうらう瀬にかよひ杨きん○あをやなきこ室の山ちこゑハかさくくとはそ花ありれなれ○やくもつの山のもとそふむ志のゝめに明めて流くるそこゑれよ鳥○猶ておもひへてうちこゑのあく此あさけのねよさ鳴らん

○水恋鳥　五十

○夏の日にもゆるわり身のわひしさに水恋鳥れ鳴となそこそなく○おもとをすてゝことこひわたる八代く山ふかみ恋鳥れ名あかつゝそこそ○山ふかく八名のうけひのさしくにみる恋鳥の声言こそ也○庭中ののゝむ中へしろくやふこ浦らん水あひ鳥れあゝぬけしきに

○貌鳥　五十一

かほ鳥　春日山に在り又三笠山にもとも　まことにひするとい色まて秋ひ
家たしをこむするともを　寸花く志そ鳴春乃野
と伊色まて　源氏にもあり是も鳥と定也但定家不知之云　又うつくしき鳥花りかえれたくひともいなり　やけ花
かほ鳥のみてもけりし云　わくらめともすら

○佛法僧　五十二

○ならの国さうの寺の道のひろけれハ鳥も唱ふ佛法僧のかす　○うちみるときうぬ三山の鳥と名をたく松もふうみ三川れ法にも○松の杉のこ林しろう在る明河のふあふ立てきけも仏法僧鳴

○啄木鳥　五十三

さゝみ鳥　あきてらつきのすとこそ

○木菟　五十四

山かつのくまむ見く流く流く鳥　是みゝつくの事也

○梟　五十五　漢云殺母鳥

物おそろしきこゑくろふれ出る鳥のうき声

是ふくろふなる也源氏にもくろふ也　又うつほの巻也　鳥乃うらおもふるに

わらうちそそろしき山かりなくらんふくろふか八是かやと云し

梟鳥　是ふくろふの物きこゆる比の名也　但又云世俗にそなとゝ云鳥と云

○山川のぬくみのうへれのかよとゝかけみゆる時そ孫まてなきうつ

建わか比方をふそ浅ふとらへそらぬく事なくらてそれともいぬや狗云そ又

とひとりみ水わりわの氣とうつせへ名遠の巣をしてうらひあうもしとこし

又うかやるり沼はもうあるや猿中比うらふ鳥の子二橋よふり但如く浅ふ

れおさゝるも云兎又そるみとも云兎比方の祢そそなとゝきあしくらうく逢

てまへのぬく井の上のとうあるそひすひの梢よきこしゝる兎又云流離も

いとけなうして茅そよし老てはそくろしともいへり

○ぬ要　五十六

ぬえこゝろよ　ぬえ鳥よことつ鳥　是怪鳥也云ふるとよ　昂て詠し八雲御説　しか

きわうろあけわれく声　○鳥に又ふるそひあふりよもきこう抱

思ふやとよぬえのこひしさ○ひさ

しのあまのうきよぬえ鳥のうらひきそりつくろしきさまそらな

○鶘胡　五十七　鳴而自鳴常好南飛絕蟲向東西開翅之始必先向

向也

○鶘胡と云鳥のうち毛れくれ多ぬまちりしつ案の残成さり鳥のうちけ

の私は鶘胡と云鳥その仙むうりをまろ鳥之仍秋の末になれはみちのち

ろとせなりふたいうされて霜雪のきを姆勢くやミ山よおり鳴おすこくさ

ひよとひわい比鳥ま山かうかもすめと云説ありと云く飛む松云比鳥も日おに

へる先うりく秋ふるへし

○鸚鵡　五十八　礼記云鸚鵡ハ能云不離飛鳥も常叫芸菜

あふむの啼ゝ月ゝのへし　○あかれもいたくやらうんこそのそをうへすあふむの同しひり

○あ俺鳥　五十九　和名よそ胡燕とりきくあまとりとよあるる又　あとりせよあり

此なるは雲の中にすみて大かた人にもみられぬなるへしその六月廿のころより七月になりて雲の中にすをつくりて子をうむ頃たちふきて雲はなれてさゝきてその子の巣にまぬなりけれはおひてなくそれ此時かりそらの人声をもきくとありふるき抱ともけるにこともおもかけしかともいつまでもそゝなめ○あさしくもひゆふひを鳴たつ雲間より宮しやをらんあまるの聲

○めし鳥　六十

○ゐそのうたかへ山の梢の紫にしとりするにつけ夕あさましくして

○鳳凰　六十一

○りくしきや桐のこずゑにすまるなるのちとせに来の鳳をみなかりけり

○鵲　六十二

瀬田にかくいをわたしてやとろしあそや

かはかたこのうたや

或説や高神楽の雨そ注之是

○うちはつるにかけ　六十三

○うつくるの鳥なかくめるく水あそひ河ろをかはてをかしうりけそ

藻塩草巻第十終

国立公文書館
National Archives of Japan